

ダンジョンに賢王が
いるのは間違っているだ
ろうか？

ひまわり先生

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ダンまち×ドラクエ列伝 ロトの紋章（ポロン）

後悔はしていない。

あと合体魔法ってロマンがあるよね。

episode 0 赤子

この物語は英雄志望でもベル・クラネル 剣アイズ・ヴァレンシユタイン 姫の物語でもない。

この物語はロキファミアリアの遠征帰りの途中、ハイエルフのリヴェリアがダンジョンの中では絶対に聞くことはない声を聴いたことから始まった。

「ん？フィン・・・止まってくれ」

「どうしたんだいリヴェリア？」

「急に立ち止まって何だ？」

「静かに・・・音を立てないでくれ・・・」

聞き間違いだったらしい。

いや、聞き間違いであつてくれた方がいい。

ダンジョンの中でもしかも14階層、中層だ。

聞こえるはずがない、人の・・・赤子の泣き声など。

「うええええん!!!」

「フィン!! ガレス!!」

「僕にも聞こえた!!! 急ぐよ!!」

「おうとも!!」

三人は遠征の疲れも忘れ、泣き声のする方へと走った。

「どっちだ!!」

「そこを左だ!!」

「声が近づいてきてるのお!!!」

ここはダンジョン、赤子の泣き声につられて魔物は寄ってくるだろう。そうなってしまうえば赤子の命はついてしまう。

これは三人が赤子の元にたどり着くか魔物が突くかのスピード勝負。

「この壁の奥からだ!!!」

「マッピングされてない場所、未開拓領域か・・・」

「声は少し遠いのお、それなら」

ドワーフのガレスは自身の武器を構える。

「どおおおらあああああ!!!」

ガレスの一撃で壁が崩れ、奥へと続く道が現れる。

「魔物の気配はないようだね」

「赤子の声もまだしている、先を急ごう」

道周りには孢子が青く発光するキノコが生えており、とても明るく神秘的であった。道を進むにつれて赤子の声はつきりと聞こえてくる。そして開けた場所に出るとその中心にその赤子はいた。

「うええええん!!!」

「大事は……なさそうだな」

その赤子は木製の籠に入れられており、頭に青い宝玉の入ったサークレットを身に付けていた。

リヴェリアは泣き続ける赤子に手を伸ばす。

「待つんだリヴェリア、コレはもしかしたら」

「ダンジョンの罠であるならお前の指が反応しているはずだ」

「……確かにそうだね」

一度止めた手を再び動かし、その籠から赤子を抱いた。

それまでずっと泣いていた赤子が泣き止み、スヤスヤと寝息を立てている。

「フフツ、かわいい寝息だな」

赤子の無事に安堵した三人だが、突如体の周りが緑色の光に包まれた。

「何なのだこれは!？」

「リヴェリア!! その子を離すんだ!!!」

パルウムのフィンの言葉はリヴェリアには聞こえていなかった。

その時彼女は頭に直接響く声にししか意識が向かなかったからである。

く麗しきエルフよ、その方を頼みますく

『リレミット』

眩い光によって視界を遮られる。

光が収まるとそこはガレスが崩したはずの壁の前にフィン、ガレス、赤子を抱いたリヴェリアが立っていた。

そして何より壊した壁が元に戻っており、その後何度崩そうとしてもあの神秘的な道が出現することはなかった。

「転移の魔法……」

「それよりもこの壁はさつきワシが壊したはずなんだがどうなつとるんだ?」

「この子はいつたい……」

これが10年前の話らしい。

そして現在は……

「テメエ、また俺の顔に落書きしやがったな」

「よかつたじゃん、みんなに大爆笑だつたぞ」

「私の部屋に虫のおもちゃ仕込んだのはアンタね」

「『キヤー——』だつてさ、ちよー面白かつたぜ」

「お前が布団に水たらしたせいで俺の二つ名が漏ウエットマンらす男になつたんだぞ」

「ぶーくすくす、超お似合い」

「「ふぎけんじゃねえ、ポロン」」

「おい!!!ポロンまたお前か!!!」

「ヤツバ、リアだ……みんな逃げるぞ」

「キュキュ」「ゴブゴブ」「キキツ」

町中を逃げ回る金髪の少年。

名はポロン。

三匹の調教テイムされた魔物、『ぶりっ娘アルミラージュ』、『ガキ大将ゴブリン』、『はぐれバツドバツ』を率いて今日もロキファミアのメンバーにいたずらをして、追い掛け回されてる。

「リヴェリアもちゃんとママしとるなあ、ウチもママアって甘えさせてもらいたいわ」
「それはやめといたほうがいいんじゃないかなロキ」

窓からのぞく二人はロキファミアの団長、フィン・ディムナと神ロキ。

外の明るい光景に二人は笑みを浮かべていたが、フィンがある事についてロキに尋ねた。

「それよりポロンのステータスだけど……」

「まったく変化なしやでレベル0や」

「レベル0……ね」

レベル0。

この世界には天界から神が自身の能力を封じて下界に降りてきており、その神が下界の子に神の恩恵ファアルナを与えることで様々な事象から経験値を得て能力を引き上げ、新たな能力を得ることが出来る。

そして初めて恩恵を受けたものはある特別な条件が無い限り、基本はレベル1からスタートする。

つまり、レベル0なんて存在しないはずなのだ。

「しかもアビリティイーもオール0で一向に上がらんし、魔法とスキルの欄には何か書いてあるようやけれど鮮明に見えへん」

「あれだけ走ってたら俊敏でも上がるはずだからね」

走ったりすれば俊敏がダメージを受ければ耐久が微々たるものではあるかもしれないが初期ステータスならば必ず上がる。

それも上がらないとなるともはやポロンが授かった神の恩恵ファアルナは異常としか言いようがない。

「ポロン、今日と言う今日は許さないぞ」

「待ってリア、そんなみんなの見てる前で尻たたきはちよつとつていうかレベル6の尻たたきはやばいって腰砕けちゃうから」

「大丈夫だ、加減してやるし、もし砕けてしまってもエリクサーを用意してやろう」

「たっ助けてくれ!!アルちゃん、ゴブさん、バツくん」

「二・・・(プイッ)」

「裏切り者~~~~ぎや~~~~」

ポロンの断末魔が響いた。

「まあ、ゆっくり調べていけばいいんちゃうん?」

「フツ、それもそうだね」

ロキは酒を片手にポロンの現状に爆笑し、フィンがポロンの断末魔を聞き、「本当に手加減してるよね」と苦笑いを浮かべている。

改めて言わせてもらおう。

この物語は英雄志望でもバル・クラネル 剣アイズ・ヴァレンシユタインの物語でもない。
まだ目覚めぬ賢王の物語である。

〈 episode 0 end 〉

episode 1 レベル0

~~~~~

むかし、むかし、あるところに数多くの魔法を操る大賢者様がおられました。

その大賢者様の使う魔法は特別でエルフ族もその魔法を真似することは出来ませんでした。

ある日、地上に太陽の影が落ちました。

その影は大きなドラゴンとなり、地上を破壊していききました。

勇者や騎士、名のある英雄がドラゴンを倒そうと戦いましたが、そのドラゴンには勝てませんでした。

地上の危機を感じた大賢者様はドラゴンを倒すため、立ち向かいました。

そして大賢者様は究極の魔法を使うことでドラゴンを倒すことが出来ました。

しかし、究極の魔法を使った代償により大賢者様は息を引き取ってしまいました。

その体はだんだんと透明になっていき、最後に残ったのは大賢者様の身に着けていた青い宝玉のはまったサークレットだけでした。

~~~~~

「クツ・・・リアのヤツあんなに叩きやがって」

自室のベッドで赤くなった尻を出してうつ伏せで横になっている金髪の少年ポロン。自身の母親代わりであるリヴェリアからお仕置きを喰らい尻が真っ赤になっていた。

ガチャツと扉の開く音が聞こえポロンがそちらに目を向けると何かの袋を持った緑色の肌をした子供の身長と同じぐらいの大きさの魔物、ゴ布林が部屋に入ってきた。

「ゴブゴブ!!」

「ゴブさん氷袋か?」

彼は『ガキ大将ゴ布林』ことゴブさん。

ポロンが調教した3体の魔物の内の1体。

ガキ大将なんて呼ばれているがとても根がやさしく、他の2体やポロンが無茶しない

よう陰で努力しているみんなの兄貴分。

優しいゴブさんは時たまロキファミアメンバーから悩み相談などを受けていたりするそうだ。

「ゴブ・・・」

『見捨ててごめん』って別に気にしてないよ」

「ゴブゴブゴブ!!!」

「いいって、埋め合わせとか気にすんなよ親友だろ」

「・・・ゴブ」

ポロンは調教した3体の魔物と意思疎通ができる。

本人曰く感覚で何を言ってるかわかるらしい。

神ロキや幹部メンバーは読めないスキルが関係してるのではなかと見解しているがそれはまた別に話そう。

「イテテ」

「ゴブ!？」

「ああ、これぐらい大丈夫さ、ゴブさんの持ってきた氷袋で少し冷やせば」

急いで氷袋をお尻に当ててあげようとゴブさんはベッドのほうに駆けていこうとした。

「しみるからそつと置いてくれよ」

「ゴブゴツ!!」

ちなみにポロンの部屋は少し汚い。

床には物が散乱しており、足の踏みどころが少ない。

こんな状況で駆け足になるとどうなるだろうか？

ゴブさんはジュースのビンを踏んでしまったのだ。

そして氷袋を持ったままポロンがうつ伏せ状態のベッドまでダイブすることになった。

思いっきり尻に氷袋叩きつけるような形で・・・

「んぎやあああああああ!!!」

「はあ〜い団長？」

今ここにいるメンバーを紹介しよう。

ポロンの絶叫を聞いてため息をこぼしたのが『ナインヘル九魔姫
リヴェリア・リヨス・アール
ヴ』

ロキファミアリアの副団長で種族はエルフ、レベル6。

ポロンをダンジョンから拾い出した3人の内の1人だ。

彼女はロキファミアリア創設当初からのメンバーでも面倒見がよく、ロキファミアリアのメンバー内では陰で『ママ』だったり『ファミアリアの真の母』なんて呼ばれたりしている。

豪快に笑っていたのが『エルガルドム重傑 ガレス・ランドロック』

彼もファミアリア創設からのメンバーで種族はドワーフ、レベル6。

彼のパワーと頑丈さはオラリオ随一であり、オラリオ最強とも引けを取らないのではないかと噂されている。

あと酒に強い。

鼻で笑っていたのは『凶狼 ウアナールガンド ベート・ローガ』

ファミリアの中でも主力を担う第一級冒険者で種族は狼人 ウエアウルフ、レベル5。少し口が悪いが内面はとても優しい。

そうツンデレさんなのである。

ベートにケンカを売っていたのは『怒蛇 ヨルムガンド テイオネ・ヒリユテ』

ファミリアでは中核を担う第一級冒険者の一人で種族はアマゾネス、レベル5。先の会話でもわかるがファミリアの団長にゾツコンなのである。

デレデレだがキレるとヤベー。

あとお胸がたわわ。

テイオネに似た元気な女の子は『大切断 アマゾン テイオナ・ヒリユテ』

ファミリアの第一級冒険者の一人で種族はアマゾネス、レベル5。

テイオネの双子の妹。

天真爛漫でお伽噺や英雄譚が大好き。

あとお胸が貧しい。

ケンカを仲裁していたのは『勇者^{フレイバー} フィン・ディムナ』
ロキファミリアの団長で種族は小人族^{バルウム}、レベル6。

創設メンバーの1人であり、戦闘面のみだけでなく指揮官としても優秀である。
他の種族に見下されやすい小人族の再興を目標に掲げている。
結婚も小人族を希望。

紹介としてはこんな感じだろう。

「あら、そういうえばアイズは？」

「アイズならレフィーヤと一緒にダンジョンに行くって言ってたよ」

「まったく、今日は大事な話があると・・・待て」

リヴェリアが一瞬口を止めた。

アイズとはベート達と同じ第一級冒険者と同じだが少し戦闘狂である。
そして何かとポロンを気にかけている。

「ポロンは今部屋にいるか？」

「あん？さつき悲鳴が聞こえてただろ」

「確かにそうか・・・」

リヴェリアが心配していたのはアイズがポロンを連れてまたダンジョンに入ろうとしたのではないかという事。

この話の前に皆さんにはポロンのステータスをお見せしよう。

ポロン

Lv0

力	：10
耐久	：10
器用	：10
敏速	：10
魔力	：10

□
■ : EX

《スキル》

・ロ※n?な+*マ

閲覧不可

・ □
■

閲覧不可

【魔法】

・	・	・	・	・
■	■	■	■	■
□	■	■	■	■
■	■	■	■	■
□	■	■	■	■

これが現在のステータスだ。

補足説明をするが神の恩恵ファルナを授けたのは7年前。ポロンが3歳の頃だ。

そう、7年も経過したがステータスが変化しなかったのだ。そして異例のレベル0。

そもそもファルナを受けるとレベル1からスタートする。

レベルが1違うだけで力量差が大きく変わる。

そのレベルが0、つまりファルナを受ける前の普通の人と変わらないのである。ダンジョンには魔物が出現し、そして人間を襲う。

そんな魔物と対抗できるため神は下界の子にファルナを与えたのだ。

それでは普通の人ダンジョンに入ったらどうなるだろうか。

他の冒険者に聞いてもこのように答えるだろう。

「自分から棺桶に足を突っ込んでいる」、「自殺志願者」、「魔物のエサ」だと。

ここまで説明したから少しは理解できるだろう。

アイズは4年前ポロンを連れてダンジョンに入った。

彼女はポロンが嫌がるも無理やりどんどん下の階層に降りて行った。

そして4日間帰ってこなかった。

リヴェリア達は顔を青ざめくまなく町の中、ダンジョンの中を探った。

居なくなつて4日目の夜、ダンジョンの10階層から大きな爆発があつたと話を聞き、リヴェリア達はすぐに駆け付けた。

するとそこには意識を失っていた無傷のアイズとポロボロのポロンが壁を背に座つて眠っていた。

だが一番驚いたのはポロン達の周りになんか多くの魔石が落ちていた事だった。

アイズがこの数をやつたのか？

だつたら何で無傷なんだ？

そしてさっきの爆発はいつたいなんだつたのか？

と疑問ばかりが頭をよぎるが、ひとまずは2人を回収してリヴェリア達はダンジョンから抜けた。

そのあと2人は目を覚ましたが何をしていたかオークの変異種が現れた後の記憶が無いとの事だった。

それ以来、アイズは何度もポロンをダンジョンに連れて行こうとする。

何度も注意してるが一向に止める気配はない。

つまり、今回もアイズがポロンを連れてダンジョンに向かったのではないかと予想したがリヴェリアの考えは違って「うわああああ、離せええええ!!!」

再びポロンの声が響き渡る。

その声を聴き、リヴェリアの顔は引きつり、他のメンバーは苦笑いを浮かべてたり、舌打ちをしたりしていた。

「お待ちせやっであれ? どうしたん?」

遅れて登場した神ロキだが場の空気が違うことに気付く。

「ロキ、ポロンを見たか?」

「ああ、ポロンならさつきアイズたんにお姫様抱っこされながら門を出ってたで」

この一言でリヴェリアの沸点が超えてしまった。

「ア~~~~イ~~~~ズ~~~~」
「!!!!!!」

リヴェリアの怒りの声が館内に響き渡り、ファミリアメンバーはママを怒らせない様にしよう深く心に刻んだという。

episode 1 end

episode 2 ダンジョン

「おい、アイズ!!! いいかんげんおいらを降ろせ!!!」

「ダメ・・・ポロンはすぐ逃げるから」

「頼む、せめて・・・お姫様抱っこはやめてくれ!!!」

現在オラリオに天高くそびえる塔バベルの前にポロン達はいた。

「剣姫が男と一緒に・・・なんだポロンか」

「剣姫がお姫様抱っこを・・・ポロンか」

「・・・ポロンか」

「その反応はちよつとショック何だけど!!!」

ポロンをお姫様抱っこで連れ出した金髪の女性は『ケンキ剣姫 アイズ・ヴァレンシユタイ
ン』

ロキファミリアの第一等級冒険者で種族はヒューマン、レベル5。

とてもきれいで美人さんだが表情があまり豊かではない。だが非常に負けず嫌いでさらに戦闘狂という一面もある。大好物はイモを油で揚げた『じゃがまるくん』である。

「アイズさ〜ん、やつと追いつきました」

「ゴブゴブツ!!!」

「キュキュツ!!!」

「キキツ!!!」

上からエルフのレフィーヤ、ゴブさん、『ぶりっ娘アルミラージ』のアルちゃん、『はぐれバッドバット』のバツくん。

「ごめんねレフィーヤ、大丈夫?」

「はひ!!!大丈夫れふ!!!」

「まくたデレデレしちやつて」

そう彼女はアイズ好き好きなのだ。

「それよりポロン!!!早くアイズさんから降りてください!!!」

「見てわかんないの!?!アイズが降りしてくれないんだよ」

「そんなのうらやまケフツ、破廉恥です」

「おいらははずいんだよ」

「こんな言い合いに5分ほど費やした。

ゴブさんが仲裁に入ってようやく落ち着いたのであった。

「ポロン、一緒に行こ?」

「いやだ!!!」

「大丈夫、私がついてるから・・・」

「無理!!!」

「お願い」

「・・・」

ポロンにはこれほどまでに嫌がる理由があった。

「アイズ先月の事を覚えてるか？」

「うっ……ん」

「アイズは俺をおいてとつとつとつと進んじまって死にかけた」

「ごめんなさい」

「それから三か月前はおいらを守るためにオークを倒してくれたけどそのオークの持っていた棍棒がおいらの目の前に落ちてきて死にかけた」

「ごめん……」

「もうあんな思いはしたくないから行かないおいらはダンジョンに潜らず伝説の遊び人になるんだ!!!」

そして懐に持っていた刃のないナイフ3本でジャグリングを始めた。

ちなみにうまく成功していたが拍手が起きたのはゴブさんとアルちゃんのみだった。

ただ、アイズも黙ってなかった。

♪～(BGM～ドラクエIII 戦闘のテーマ～)

「今度は怖い思いをさせないから……一緒に行くろう？」

アイズの上目使いのおねだりが発動。（本人は無自覚）

ポロンの心に会心の一撃。

心が揺れ動く。

「ポロン、私達も今回はついていくので大丈夫ですよ」

「ゴブ」、「キュキュ」、「キキ」

皆の説得が入る。

ポロンの心はさらに揺れ動く。

「……わかった、行けばいいんだろ!!!」

♪

アイズ達はポロンの説得に成功した。

そしてポロン達はダンジョンに足を踏み入れた。

“ズツザツ、ズツザツ”

くダンジョン1階層く

「ポロンってレベル1なんですすよね」

「そうだけど何だよレフイーヤ」

「何歳のころからファルナを授かったんですか？」

「確か・・・7年前だったかな？」

「7年ってまだ3歳じゃないですか!!」

普通3歳の子供にファルナを刻むのはまず少ない。

同じファミリアの親が子を産んでその子を同じファミリアに入れるために授けることは考えられるがその他ではダンジョンでこき使う為だとか、汚い理由で授ける場合しか考えられない。

「ポロンは英雄に憧れてたから・・・無理言つてリヴェリアに許可を取ったらしいよ？」

「アイズ!!!何で言っちゃうんだよ!!!」

ポロンは顔を真っ赤にしながらアイズを責めた。

そうポロンが3歳の頃、『僕も英雄になりたい』と言つて駄々をこねたのが原因だった。

猛反対だったリヴェリアだったが、フィンとロキは違つた。

ロキの勘とフィンの勘がポロンを冒険者にした方がいいと聞き、しぶしぶ了承した。

「でも7年も続けてたらレベルも・・・」

「それはおいらのスキルが原因みたいなんだ」

「スキルですか?」

「うん、名前もわかんないんだけどなんか変なスキルがあつてそのせいでステータスが伸びないんじゃないかって聞いた」

ギルドには内緒だけどつと後に付け加えたが、ポロンは自身がレベル0でステータスオール0のことを知らない。

このことを知るのには神ロキに団長フィン、副団長リヴェリア、ガレスの4名。

幹部メンバーにもこの事を話してはいない。

中には違和感を覚えてる者もいるが口に出すことはなかった。

そしてポロンや他のメンバーにはレベル1と嘘をつき、ステータスもわけのわからんスキルがあるせいで成長を阻害していると説明した。

「へーそんなスキル聞いたことないですね」

「うん、私もない」

「リアも知らないっていうくらいなんだしおいらが初めて出現させたスキルかもな」

そんな会話をしながら歩いているとアイズとレフイーヤが戦闘態勢を取った。

「ゴブリンが3体」

「ポロン・・・」

「・・・分かった」

ポロンも持っているナイフを構えた。

「ゴブさんは右のヤツを・アルちゃんは左のヤツ・バツくんはみんなのサポートだ」
「ゴブ!!」、「キュ!!」、「キキ!!」

「3・・・2・・・1・・・行くぞ!!!」

合図と共にポロンは駆け出した。

♪～（BGM～ドラクエⅢ 戦闘のテーマ～）

まずはゴブさん。

ゴブさんの攻撃。

自身の持つメイスを振り、右側にいたゴブリンAに命中した。

そのままメイスの攻撃を喰らったゴブリンAは右側に飛ばされ他の2体と距離を離された。

先程の攻撃によりひるんでしまったゴブリンAはうまく立ち上がることが出来ず起き上がれない。

ゴブさんが続けて攻撃。

頭部にメイスの一撃を入れた。

ゴブリンAは消滅し、『ゴブリンの魔石』を落とすした。

次にアルちゃん。

アルちゃんの攻撃。

自身の武器であるトマホークを投げ、ゴブリンBの右足を落とすした。

苦痛に悲鳴を上げ、うつ伏せ倒れるゴブリンB。

アルちゃんが続けて攻撃

アルちゃんはにつこりしながら近づき、2つ目のトマホークを両手で持ち無防備なゴブリンBの頭に振り落すした。

ゴブリンBは消滅し、『ゴブリンの魔石』を落とすした。

最後にポロン。

ポロンの攻撃。

ポロンはナイフをゴブリンCの首元を切ろうと振った。

ゴブリンCは突然の奇襲に反応しきれず防御が間に合わない。

これは勝ったとポロンは勝気になった。

ゴブリンCに攻撃が当たった。

・ ・ ・ダメージはない。

首元にナイフが当たったがまったく切れなかった。

何故だとポロンが装備を見直した。

何とポロンが装備していたのはジャグリング用の刃のないナイフだった!!!

「あの〜30秒待ってもらえませんか？」

ゴブリンCの攻撃!!!

「ガッ!!!」

ポロンにダメージ!!!

ポロンは腹を爪で攻撃され流血している。

ゴブリンCの攻撃!!!

だが、バツくんの支援攻撃により攻撃が中断された。

そしてアイズの攻撃。

ゴブリンCは消滅し、『ゴブリンの魔石』を落とす。

♪

「もうやだ!!! 帰る!!!」

「大丈夫、傷もふさがったよ？」

ポロンは大泣きし、帰ると駄々をこね始めた。
ちなみに傷はポーションですぐに治った。

「無理、死んじゃう」

「それはポロンが演芸用のナイフを使ってたからです」

「だって……だって……」

「本物のナイフであれば倒せてましたよ」

「……」

「もつとまじめに取り組んでください!!!!」

「……はい」

ポロンは言い負かされてしまった。

「さあちゃんと刃のあるナイフ装備して次行きますよ!!!次!!!」

「……はい」

この後、めつちやゴブリンと戦った。

くダンジョン6階層く

ゴブリンを十数体倒した後、どんどん進み6階層まで足を進めていた。

「ハア・・・ハア・・・」

「やりましたね、ウォーシャドウも倒せましたよ」

「さすがにもうつらいよ」

ポロンも連戦続きでかなり消耗していた。

「聞いてたステータスでここまでこれたんですからステータスも大きく変動していますよ」

「・・・ホントかなあ」

レフイーヤの言葉ににやけるポロン。

実際に自分が成長したんじゃないかと感じていた。

今までより多くの魔物と戦い、各上の魔物を倒すこともできた。

帰ってからのステータス更新が楽しみになってきた。

「さて、ポロンのバックパックもいっぱいになってきましたし戻りましょうか」

「・・・うん、わかった」

少し歯切れの悪かったアイズだが戻ることを了承した。

「よし、帰ろ〜!!!」

ポロンが足を動かそうとした時、足を何かに掴まれた。

「うわっ!!!何だ!?!」

ポロンが自身の足を見ると泥が足にまとわりついていた。

「何で泥が・・・痛て!!」

ポロンは何か引つ張られて転んだ。

「もうポロン、何してるんですか行きますよ」

「待ってレフイーヤこの泥が!？」

ポロンはある事に気付いた。

足にまわりついていた泥が手の形をしていたことに。

「レッ・・・レフイーヤ!!!魔物!!!泥の手の魔物!!!!」

♪～(BGM)～ドラクエⅢ 戦闘のテーマ～

泥の手の魔物Aが現れた。

ポロンはナイフで泥の手の魔物Aを攻撃。

ナイフが効いたのかポロンの足から離れた。

「何ですか!?この魔物!？」

「おいらが知るかよ!!!」

「・・・!?」

泥の手の魔物Aは仲間を呼んだ。

泥の手の魔物AとBは仲間を呼んだ。

泥の手の魔物AとBとCは仲間を呼んだ。

・・・

「・・・凄いや増えた」

「そんなこと言ってる場合じゃねえ!!!!」

泥の手の魔物5体の攻撃。

ポロンの動きが封じられ口元を覆われた。

ポロンは息が来ず苦しんでいる。

レフィーヤの攻撃。

ポロンに攻撃していた5体を倒した。

「ポロン大丈夫ですか!？」

「死にゆかと思った・・・」

泥の手の魔物の攻撃。

アイズは攻撃をかわした。

「^{テンベスト}目覚めよ」

アイズは魔法エアリエルを発動。

風を身に纏った。

「リル・ラファールガ」

アイズの攻撃。

泥の手の魔物が数体消滅した。

「ポロン!! 詠唱が終わるまで耐えてください!!!」

「自信ないけど頑張つてやる!!! お前からレフィーヤを守るぞ!!!」

「ゴブゴブ!!!」、「キュキュ!!!」、「キキツ!!!」

泥の魔物の攻撃。

ゴブさんが防御した。

「鬼さんこちら手のなる方へ〜」

ポロンは変な踊りをした。

魔物が一斉に襲いかかってきた。

「ちよっ?!? 限度があるだろ!!!」

ポロンは逃げ出した。

だが、回り込まれてしまった。

「レフイーヤ!!! ヘルプ!!!」

「誇り高き戦士よ 森の射手隊よ 押し寄せる略奪者を前に弓を取れ 同胞の声に応え
矢を番えよ 帯びよ炎 森の灯火 撃ち放て 妖精の火矢 雨の如く降りそそぎ
蛮族どもを焼き払え」

レフイーヤの魔法が発動。

「ヒュゼレイド・ファラーリカ!!!」

全部の魔物に火矢が命中!!!

全ての魔物が消滅した。

「あちちち!!!尻燃えッ!!燃えてる!!!」

「あっ・・・ごめんなさい!!!」

♪

ポロンのお尻の鎮火も終え、ダンジョンを抜けた。

「それにしてもあの魔物おかしいですよ」

「魔石がでなかった・・・」

あの魔物は魔石を落とさなかったのである。

「おいらはよく知らないけど2人も見たことないんだろ？」

「はい、仲間を呼ぶ魔物は他にもいてかなり危険視されてますけど見たことも聞いたこともない魔物でした」

「新種……」

「おそらくは、ですが上層にしてはとても強すぎます!!」

たしかに単体のみならばとても強いとは言えないが仲間を呼ばれたら手足の動きが封じられ殺される。

まさに人海戦術を巧みに使ってくる魔物だった。

ポロン達は換金の際にギルド職員に魔物の特徴を伝え、周りに周知して貰う様お願いした。

その魔物はマドハンドと命名されウォーシャドウに続く、初心者殺しと呼ばれるようになった。

「それにしても疲れたなー」

「今日はステータス更新が楽しみですね」

「ああ、アイズもおいらを連れ出してくれてありがとう」

「……うん」

また歯切れが悪く返事をした。

ポロンは特に気に留めず、そのまま歩みを進めようとした。

「まって……」

「ん？アイズ？」

「どうしました、アイズさん？」

アイズが2人を引き留める。

アイズはずっと聞きたかった、言いたかったことをついに口にしました。

「何で……ポロンは魔法を……使わないの？」

「アイズ、何を言ってるんだ？おいらは魔法は覚えてな」

「4年前のあの時……ポロンは使った……はず……」

「どういう事ですかアイズさん？」

アイズは4年前を思い出しながら語った。

「私とポロンは今日みたいにダンジョンに潜ったけど10階層で変異種のオークと出会った」

「その時私は倒せなくてポロポロになって倒れた」

「だけど目を開けたらガレスが私を担いでいた」

「ガレスに聞いたら私に外傷はなくてポロンが重傷、変異種のオークは倒されて周りにたくさん魔石が落ちていたって」

「それはたまたま通りかかった冒険者が倒してくれたんだろ？」

ポロンもこの時は意識を落としており、まったく記憶にない。

「でもあの時にポロンが変わった」

「変わった・・・ですか？」

「それが外れた時」

アイズはポロンの額に指を指す。

「その兜が外れた」

「はああああ!!!」

ポロンは声を上げて驚いた。

「マジで!!おいらのコレ1回取れたの!?!どうやって!?!」

アイズの肩を掴み上下に揺らした。

何故こんなにも驚いているのかと言うと10年間過ごしてきて一回もサークレットが外れたことが無かったからだ。

「わからない、地面に落ちたところしか見てない」

「うっそ~~~~さん」

あからさまにがつかりしたポロン。

正直に言ううちよつとダサいと思っっている。

「でも、そのあとポロンが『俺が守る』って言った」

「おいらが？アイズを？」

コクつと頷くアイズに対し、まったく記憶にないと顔に出てるポロン。話しがなかなか進まないためレフィーアが2人を止めた。

「いったんこの話はやめて帰りましょう」

「そう……だな、おいらは全く覚えてないし」

「うん……分かった」

「そうです、戻ってから話しましょう」

こうしてポロン達は話を中断し、拠点^{ホーム}に向けて歩みを進めた。

だがポロン達はまだ気づいてなかった。

帰ってから始まる地獄^{お説教}については……

episode 2 end

episode 3 白兔

「ああああ・・・しんどい」

みっちりとりヴェリアからお説教をもらったポロン。

そんな彼だが今現在はホームのトイレ掃除を罰としてやっていた。

「てか何でおいらまで罰を受けないとなんないんだ!!!」

「ゴブゴ・・・」

「落ち着けて言われても落ち着いていられるか!!!」

「ゴブゴブゴ・・・」

「『早く終わらせないと』ってなんでだ?」

「ゴブゴゴブゴ!!!」

「ああ、ベルと特訓があるんだった!!!」

コクつと頷くゴブさん。

「こうしちゃいられない、ゴブさんとつとと終わらせよう」

こうして二人は綺麗にそしてスピーディーにトイレ掃除を終わらせた。

〜廃教会〜

ポロンとタイムされた魔物3体はオラリオ外壁側の寂びれた廃教会に来ていた。

「ベル〜〜〜、いるか〜〜〜」

「は〜〜〜い、今行きます〜〜〜」

廃教会の中から1人の白髪少年が出てきた。

「すまねえ、トイレ掃除に手間取っちゃって遅れちゃった」

「大丈夫だよ、僕もホームの掃除してたからさ」

彼の名前はベル・クラネル。

種族はヒューマンでレベル1。

最近オラリオに冒険者になるために田舎から出てきた。
特徴的な白い髪に赤い目。

体の線も細く、あまり冒険者向きではない。

そしてアイズに惚れている。

なんで別ファミリアであるベルと特訓することになったのか。

それはとある夜の出来事だった。

|||||

く豊穰の女主人く

ポロンは遠征に参加していなかったがロキファミリアの宴会に出ることになった。

少し居心地の悪さを感じながらも彼の持ち前のポジティブさと大道芸でみんなを盛り上げた。

そんな中、ベートがある話を始めた。

「なあ聞いてくれよら階層にいたトマト野郎の話」

「トマト?」

「ああ、帰る途中で何匹か逃したミノタウロスで最後の1匹だけ5階層でアイズが始末したんだがよ」

「いかにも駆け出しのガキが逃げたミノタウロスに追い詰められてよ」

ポロンはこの後の話に予想がつき、気分を悪くした。

「……やめろよ」

「それでアイズが細切れにしたくせー牛の血を浴びて真っ赤なトマトみてえになったんだよ」

「……やめろ」

「しかもそのトマト野郎、叫びながら走ってどっか行っちゃまってさ」

ポロンはどんと気分が悪くなり、それと同じく怒りもこみあげていた。

「あの状況じゃ仕方なかったです」

「いい加減にしろベート、そもそもあのミノタウロス逃がしたのは我々だ、恥を知れ」

「あ？ゴミをゴミと言って何が悪い」

「やめろって言うてんんだろ!!!」

ポロンはその場から立ち上がり、ベートの顔を殴った。

その時、同時に店から出る1人の少年がいた。

(あれってまさか!!!)

ポロンは瞬時にベートの話していた冒険者が出て行った少年だと悟った。

「ゴブさん!!アルちゃん!!バツくん!!追ってくれ!!!」

ポロンの号令を受けた3体とポロンは店を飛び出し、少年の後を追った。
一方で店の中でロキファミリアのメンバーは驚愕に満ちていた。

「・・・ねえロキ、ポロンでレベル1なんだよね?」

「ロキこれはいったいどう事なの?」

ヒュリテ姉妹はロキに問い詰める。

この二人だけでなく宴会に参加したメンバーが思っていた。

なぜレベル1であるポロンがレベル5であるベートを殴り飛ばせたのか？

今、ベートはポロンに顔を殴られ3m弱吹き飛び、気絶している。

本来ならあり得ない事実に驚愕した。

だがこのことに関してはポロンの秘密を知っているフィン達3人も驚いた。

しかしこの場にはロキファミリア以外の人物もいる。

ここでポロンの情報が明るみになるのを避けるためにフィンは一芝居打った。

「ベートも悪ふざけはそれぐらいでいいんじゃないかな？」

フィンはガレスにアイコンタクトを送るとガレスは頷き、ベートに近寄った。

「ふざけて後ろに自分から飛びおつて、ずいぶん強く自分から飛んでおつたが大丈夫か？」

ガレスはベートの口元に耳を近づける。

当然、本当に気絶している為、何も話していないがガレスは相槌をする。

「ん？何々？自分から吹っ飛んだ時少し脳が揺れて吐きそうじゃと!？」

「ベート店ん中ではいたらあかんで、ミア母ちゃんに出禁にされてまう」

「おいガレス、そのままベートを運んでくれ」

「まだまだ飲み足りないが仕方ないのお」

ガレスはベートを運び、店から出た。

周りの冒険者も「なんだ、わざとか・・・」とどうにか納得していた。

「でだ・・アンタらここの修繕費は？」

「ミツミア母ちゃん!？」

「どうなんだい？」

「修繕費と迷惑料込でちゃんとお支払いいたします」

「ちゃんとしてくれるならこつちも文句言わないさね」

「お心づかい感謝します」

ミアが再び自身の立ち位置に戻ったのを確認するとロキが深い溜息を吐いた。

「ふうく、危うく出禁になるとこやった」

「心配なのはそこじゃないだろう」

「そつちはホームに帰った時に説明したる」

幹部組だけは気づいていた。

ベートが自分から吹っ飛んだのではなく、ポロンによつて吹っ飛ばされたことを。

ただ団長たちが一芝居打ってまで他のものに知られたくない意図がある事が分かった為、その場で深追いはしなかった。

さて、視点をポロンの方に移そう。

「待て・・・待って・・・待つ・・・て・・・待って・・・くだ・・・さい」

ハアツハアツと息を切らすポロン。

「速すぎない!?!」

ポロンと白髪の少年とのスピードは歴然の差だった。

「ハアツハアツ・・・バツくん!!アルちゃん!!先に行つて止めてきてくれ!!!」

「キキツ!!」「キユ!!」

ポロンを除く魔物の中でスピードが速いのは地上ではアルちゃん、空中だとバツくんになる。

アルちゃんはウサギが原型の為、脚力が強い。

またポロン達とダンジョンを潜ることで経験値を稼ぎ、レベル2の冒険者に引けを取らない俊敏さを得ている。

バツくんも同様だ。

コウモリの為、俊敏さは元々高くない。

だが、狭いダンジョン内でも素早く移動できるよう自力で訓練し、ダンジョンにいるバッドバットとは比較にならない速さを手に入れた。

「魔物!? やめろ!!! 邪魔しないでくれ!!!」

白髪の少年の声が聞こえる。

アルちゃんとバツくんが追いついたみたいだ。

「ハア・・・ハア・・・追いついた」

息を乱しながらもようやくポロンは白髪の少年に追いついた。

「何だよ・・・ほつといてくれよ!!!」

少年が声を上げた。

「ほつとけるわけないだろ、防具も身に着けないでダンジョンに行こうとしてる冒険者

をや」

白髪の少年は腰にあるギルドの支給品のナイフ一本を持ち、防具やポーション等の必需品も今は持ち歩いていなかった。

「・・・君も僕を笑いに来たんだろ」

「は？」

「そうだよ!!僕は弱い!!弱いんだよ!!」

「初めてゴブリンを倒したぐらいで神様に報告しに帰っちゃうようなガキだ!!!」

「ミノタウロスに襲われそうになって腰を抜かした弱者だ!!!」

「でも!!それでも!!」

少年はポロンの腕を掴み、叫んだ。

「あの人がみたいに・・・あの人に認められるために・・・僕は強くなりたい!!!」

その言葉にポロンの心が揺れ動いた。

自分は諦めてしまったな・・と。

最初は物語の英雄などに興味をひかれ、冒険者になった。

だけど7年も才能の芽が伸びず、すでにポロンの中には英雄の二文字は消えていた。

だからこそ少年の覚悟のこもった瞳に、声に惹かれた。

胸が熱くなった。

「ああ、強くなつてベートを見返してやろうぜ!!」

「え?」

予想してた解答と違ったため、きよとんとする少年。

そんなことも気にせずポロンは続けた。

「よし!!そうと決まれば特訓だ!!!」

「えっ・・ちよつと待って」

急な展開についていけず少年は焦った。

「おいらはロキファミアリアのポロン、こいつらは親友のゴブさん、バツくん、アルちゃん」
「ゴブ」「キキ」「キュ」

「えつと・・・ヘステイアファミアリアのベル・クラネル・・・です」

流されるがままに自己紹介をしたベル。

そのベルの手をポロンが掴んだ。

「ベルだな、それじゃさっそく特訓スタートだ」

「えっ・・・え~~~~~!!!」

こうして、ポロンとベル・クラネルの運命が交じり合った。

|||||

「ふう・・・いい汗かいたな」

「つてポロンは戦ってなかったでしょ!!」

「ゴブ」

あの出来事が起きてからこうして時間が空いたときに一緒に特訓をするポロン一味とベル。

今日はゴブさんとアルちゃんを相手に模擬戦闘をしていた。

「ポロンも参加しないの？」

「いや、もうおいら君達の次元についていけないんだけど」

ベルはこの特訓を始めてからどんどんステータスが上昇している。

特に敏捷はアルちゃんに負けを取らないぐらいに上がっている。

一方、最初の方こそ参加していたポロンだが、ベルの成長に追いつかずもう魔物たちにお任せ状態だった。

「そういえば明後日から祭りだけどベルはどうすんだ？」

「祭り？」

「ああ、モンスター・ファイリア怪物祭」

ガネーシャ・ファミリアが主催する祭。

ダンジョンにいる魔物を調教し、その魔物同士をコロシムで戦わせる見世物だ。冒険者以外にも多くの人が集まり例年盛大な盛り上がりをしている祭りだ。

「出店やセールなんかもやってるからデートに最適なんだぜ」

「デッデデデートオ!!」

「そうさ、アイズでも誘って回ればいいじゃんか」

そうポロンはベルがアイズに尊敬と好意を寄せているのを知っていた。

「でも、まだ話したこともないし、急にデートなんて・・・」

「あまいなあベル少年」「キュキュツ」

指を振るポロンとアルちゃん。

ちなみにポロンの方が年下である。

「アイズははっきり言って美人だ」

「それは・・・はい／＼／」

「スタイルも悪くないが・・・天然すぎる」

「天然・・・ですか」

「ああ、それに戦闘狂だし偏食だし戦闘狂だし・・・うぎやああああ!!!」

さすがのポロンも冒険者になってからの七年間、つもりに積もったアイズへの不満が爆発した。

「ハア・・・ハア・・・悪い、取り乱した」

「まあ、何が言いたいかと言うとアイズはモテる」

「やっぱり・・・」

モテるといふ言葉を聞き、テンションの下がるベルだがそんな姿を見たポロンは悪い笑顔をしながらベルの肩を組む。

「だがベルは他の有象無象とは、ちがう」

「え？どうということ？」

ポロンは親指を立てて自分を指差した。

「おいらがいるだろ」

いまいちポロンの話が呑み込めず？マークを浮かべるベル。

「だ〜か〜ら、当日は俺がベルのキューピッドになってやるってことよ」

「えっ・・・え〜〜〜!!!!」

「名付けて『無表情なあの子もベルにメロメロ大作戦（怪物祭編）』!!!!」

はたして、ベルの恋路は上手くいくのでしょうか。

〜 episode 3 end 〜

episode 4 神の宴

ポロンとベルが特訓を始めてから数日たった後、ガネーシャファミアリアのホームでは神々が集まり、宴を開いていた。

そんな中でタツパーを片手に会場の食べ物を一心不乱に詰めている小さな神がいた。

「これもこれもこれも、ベルくんのために持って帰ろう」

彼女は炉の女神ヘステイア。

ベルの所属するヘステイアファミリアの主神。

艶やかな黒い髪のツインテールに小さな背丈に似合わない大きな胸部が特徴だ。

ヘステイアは普段ならこのような場に顔を出さないが、ある神に合うために今回は参加した。

「こんばんは、ヘステイア」

「フレイヤ……」

嫌な顔をしながら声をかけてきた方を向く。

銀髪のとても美しい女神。

ああ、彼女のためなら私はどんなことでもしてみせよう。

・・・おおつと、語り部としたことがすまない。

彼女の魅力に取り憑かれていたようだ。

彼女は美の女神フレイヤ。

彼女のファミリアはオラリオの中でも最大派閥のひとつであり、ファミリアの団長はこの世界でたった一人のレベル7だ。

「ボク、君の事苦手なんだよね」

「フツツ、私はあなたのそういう所好きよ」

「おっ、フレイヤ、どチビ」

ヘステイア達の間に入ってきたのは皆さんご存知の神。

特徴的な赤い髪、関西弁、まない「ア、ア、ン？」

・・・ぜっぺ「ア、ア、ン？」

「……すれん」……(怒)」

神界のトリックスターことロキ様であられる。

「あら、ロキじゃない」

「そうだロキ、君に訊きたいことがあるんだ」

「どチビがウチに？明日は雪が降るんやないか？」

当たり前だと言わんばかりにバカにした言葉出るロキ。

ぐぬぬと悔しそうな顔をしながら言い返すのを我慢し、ロキに本題を告げる。

「君のファミリアの劍姫、ヴァレン何某に付き合ってる男や伴侶っているのかい？」

「あほう、そんな奴いたらウチが八つ裂きにしたる」

「ちっ」

へステイアがなぜこんなことを聞くのかと言うとベルの発現したスキルが原因だった。

ベルがミノタウロスに襲われアイズに救われた後、ステータス更新を行った時にそのスキルは発現した。

リアリス・フレッセ
憧憬一途

相手を想う事で成長を保身させるスキル。

つまり、アイズに憧れる、アイズのように強くなりたいと思えば思うほど強くなって行く。

今までヘステイアの聞いたことの無い成長促進スキルだった。

ちなみに補足するとヘステイアはベルが大好きである。

そのためベルのスキルからアイズに想いを寄せてる事を知って嫉妬したのだ。

ロキの解答に対し舌打ちしたのはアイズにそういう相手がいればそれとなくベルに伝え、失恋した所で自分に好意を寄せさせようとしたのだ。

「仲がいいのね、2人とも」

「「ど」が(や)!!!」

なんだかんだで相性のいい2人である。

「実はまだ聞きたいことがあるんだ」

「なんや」

ヘステイアとロキは少しフレイヤから離れ、ヘステイアがロキに質問した。

「君のところのポロンくんだけ、彼は何者だい？」

「・・・どういう事やどチビ」

急にロキの雰囲気を変化した。

先程のおちやらけた感じはなくとても冷徹だった。

周りの神々も一斉にロキ達の方を向く。

オラリオに来る前のロキは神界で多くの神を殺した悪神であった。

オラリオでファミリアを創ってからかなりまろくなつたが神々は悪神ロキ復活かと恐る恐る見ていた。

ロキの雰囲気少し驚きながらもヘステイアは話を続けた。

「君にだから言うけどボクのアミアリアの子が最近、そのポロンくと特訓をしてきて」「ポロンが？特訓？」

ロキはあの不真面目なポロンが特訓をしているだなんて、それこそバベルでも折れるんじゃないかと一瞬頭によぎったがすぐに切り替え、ヘステイアの話に集中した。

「それでさ、その特訓をしてから僕の子に変なスキルが発現したんだよ」「待て、どチビ」

スキルと言う言葉に反応した。

「その話はまた今度聞いたる、ええな？」

「うっ、うん・・・」

そう言い残したロキは出口の方に進み始めた。

「どチビの貧乏ドレスを見て笑えたり帰るわ」

「なっ!!何だとおお!!」

ケラケラと笑いながらロキは退出した。

「ロキのあの感じ、久しぶりに感じたわよ」

「フレイヤも『用はすんだから帰る』って帰るし」

「あんた、今度は何をやらかしたのよ」

ヘステイアに声を掛けたのは右目を眼帯覆う赤い髪の女性だった。

「ヘファイストス!!!君に会いたかったんだ!!!」

鍛冶神ヘファイストス、ロキやフレイヤの探索系ファミリアとは違い、商業系ファミリアとして最大派閥に組みしている。

「ヘステイア、また懲りずにお金かしてなんていうんじゃないでしょうね」

「ちがうわい、バイトもちゃんとしてるし、ファミリアだつてできたんだからな」

「あんたのどこの子、確かベル・・だったかしら？」

ベルという言葉に反応し、ヘスティアは思い出した。
ヘファイストスにお願いしたいことを。

「ヘファイストス!!!」

「・・・急に何よ」

「」でまた物語の歯車が動き始める。

「ベル君の武器を作ってくれないか!!!」

「ダメ」

「頼むよ」

「ダメ」

「一生のお願いだ」

「ダメ」

・ ・ ・ 今回の結末はまた別の機会にでもお話ししよう。
それではまた次回でお会いしましょう。

〈 episode 4 end 〉

episode 5 怪物祭

「出店の並ぶ通り」

今日のオラリオはいつもよりも活気が良く、賑わっていた。

モンスター・ファイリア
怪物祭

ガネーシャファミリアが主催するオラリオ最大の祭だ。

「おや、デートかい!!そつちのかわいいお嬢さんにおまけだ」

「ちっ、見せつけやがって、カップルなんて滅んじまえ!!」

「おいおい、あれってヘスティアのところの子じゃないか!?!これは大スクープだ!!!」

白髪の男の子、ベルが金色で長髪の人物と手を繋ぎながら祭を見回っていた。

金髪の人物は緑のワンピースを着こなし、ピンクの唇がとてもキュートであった。

「.....」

「.....」

「・・・ねえ」

「なんだ・・・」

「何で僕は君と一緒に祭を周ってるのさ」

「・・・ごめん」

「・・・」

「・・・申し訳ございませんでした!!!」

ベルに金髪の女性、もとい女装したポロンが謝罪した。

なぜベルはアイズとではなく女装したポロンと一緒に行動しているのか。

それは祭の前日での出来事だった。

↳黄昏の館（祭前日）↳

「はあく!!!連れていけない!?!」

「そや、アイズたんは明日、ウチとデートや」

「おまつ・・・いったいなにしたんだよ」

「・・・(プイッ)」

ポロンはベルのためにアイズを祭に連れて行こうとしたが思わぬアクシデントが生じた。

まさかの先約、しかもロキだった。

(くそっ、これじゃおいらの面子が立たないじゃないか)

アイズを誘う為にはロキを騙して連れ出せばいいのだがそこが難点だった。

まず神に嘘が通用しないこと。

これはすべての神に通用することで子供達人間の話すことが嘘か嘘じゃないかを判断することが出来る。

だが嘘が通じないだけでなく騙す相手がロキだという事が一番の問題だった。

ロキはトリックスターと呼ばれるほどの策略家だったのだ。

天界ではあらゆる手を使って神々に殺し合いをさせた等の過去がある。

ポロンはまず、なぜアイズがロキと行動を共にすることになったのかを聞いた。

「アイズたんにもちよつとした罰や、ちようどウチも用事があつて用心棒が欲しかったん

や」

「アイズ……」

ポロンがアイズを睨みつけるとアイズは目を逸らす。

「ロキ、おいらはどうしてもアイズを誘いたいんだ（ベルの為に）」

「なんや、ポロンはアイズたんが好きやったんか」

「ちやうわ!!!」

突拍子もないことを言われ、ロキの口調になってしまったポロン。

「ロキ……言わせてもらうが本当にこのままでいいのか？」

「なっ、なんや急に」

「アイズの容姿が良いのは認めよう……だが中身が残念すぎる!!!」

部屋の温度が少し下がった。

だがポロンは気づいていない。

「コミュ症、天然、戦闘狂、超偏食家と何一ついいのがない!!!」

急激に温度が下がる。

ロキも顔が真っ青だ。

ポロンは熱く語ってるせいで気づかない。

「おいらもアイズには長年苦勞してるがここいらが潮時だと思ってる」

「このままのアイズじゃファミリアの迷惑になるかもしれないねえ」

「そこでこの祭りを一緒にまわっているんな人と触れ合い脱コミュ症って作戦さ」

ポロンはアイズに向け決め顔ウインク決め・・・

「脱コミュ症の為、おいらと一緒にブベラアッ!!!」

頬に一撃、アイズの平手が放たれた。

会心の一撃!!

ポロンは目の前が真っ暗になった。

「ロキ、明日は予定通りで」

「は・・・はい」

ポロンのキューピッド作戦、開始前に失敗。

く噴水前く

「つと言うわけだ」

「いや、完璧ポロンが悪いじゃん」

「神相手に嘘はつけない・・・これしか手札はなかったんだ」

ベルは少し落ち込んだがポロンに対して別に悪い印象は抱かなかった。
むしろ自分の為に行動してくれた感謝の方が強かった。

「それにしてもなんで女装？」

「ロキのヤツが『ウチの事を騙そうとした罰や』って言って着させられた」

しかも着なかつたら一週間リアの特別教室と言う地獄のおまけがあった。

「まあ、似合ってる？ からいいんじゃない」

「よくねええやい」

そんなこんなでポロンとベルは2人で出店を周った。

く数分後、『豊穰の女主人』前く

「じやつ頼むにや!!!」

「はい?」

ポロンとベルは豊穰の女主人で働いてる猫人、アーニヤ・フロームルにお金の入った巾着を渡された。

「察しが悪い奴等にや、シルがサボって祭りに行ったんにやが財布を忘れたんにや」

「ちよつとくお宅の猫さん、頭のねじが飛んでるみたいなんですけどく」

「ポロン言い過ぎだよ、ほらすごい威嚇してるし」

シャーつと言いながらポロンをにらむアーニヤ。

そんな中店の中から一人の女性が出てくる。

「すみません、クラネルさん、ご迷惑をかけてしまい」

彼女はアーニヤ同様豊穡の女主人で働いてるエルフのリユー・リオン。

「実は・・・」と事のあらましを説明する。

どうやら彼女の同僚が休暇を取り、祭りを見入ってるそうなんだが財布をここに忘れていったとのこと。

「わかりました、僕も今日は祭りを見て回る予定なので見かけたら渡しておきますね」

「ありがとうございます、クラネルさん」

「ねえ、おいらにはなんか言うことないの」

「ポロンさん……くすねたらわかりますね」

ポロンに眼力だけで威圧をかけるリユー。

ロキご用達の店と言うこともあり、ポロンのいたずらの件は多く耳にする店員たち。だからここの店員は何かとポロンへのあたりが強いのである。

そのことはポロンも十分理解しているため、言い返せない。

「そそっそうだ!!!手分けして探したほうが早く見つかるな!!!うん、そうしよう!!!」

「ポロンどうし「じゃあおいらはこっちを探すからまたな!!!」ええええ!!!」

この場から逃げるかの如く立ち去ったポロン。

「ポロン……どうやって合流するつもりなんだろ」

ポロンに付き合うベルに同情するリユー。

ベルはアーニヤから財布を受け取り、祭りで一番にぎわっている決闘場の方へと足を延ばしていった。

{
e
p
i
s
o
d
e
5
e
n
d
}

episode 6 叫び

く賑わう街中く

「さてと・・・おいらも楽しんじゃおっかなあ」

ポロンは道を歩いていると一点の古着屋を目にする。

「おっ、おいらのリーダーが反応してるぜ」

ちなみに今現在ポロンはロキとファミア内のポロンからの被害の会により、化粧にウィツグに女物の服、つまり女装中である。

「さっさと着替えたいし、そこで見繕うか」

く服を物色中く

「へへっ、いいねえ」

ポロンが身にまとったのは青い七分丈シャツの上に緑色の布を羽織り、緑色のダボつとしたパンツを胸のあたりからボタンでつなげている。靴は角のない明るい黄緑。

そして極めつけはまるでツインテールのように二股に分かれ赤と青のストライプの帽子。

「そしておいらがいずれ必要になると考えたこの付け鼻とメイクで・・・完成だ!!!」

自身の鼻が隠れるほどの大きさの赤くて丸い付け鼻とメイクで頬まである大きな唇を描いた。

鏡に映る自分を見てにやりと笑うポロン。

「完璧だ・・・これぞまさしく伝説の遊び人!!!」

見た目は完全なピエロだがあいにくこの世界にはピエロという存在は認知されてなく、周りから変な服着てるなと思われてない。

「そして祭りでにぎわってる、人がたくさん、お金たくさん・・・ぐえへへへ」

よだれを垂らしながら満面の笑みを浮かべるその姿はもはや不審者、変態にしか見えない。

そんな姿を怪しく思った祭りの警備にあたっていたガネーシャファミアリアの人がポロンをつかむ。

「おいそこのお前!!なんだその恰好は!!!」

「いつ!?なんだよおいらはまだなんもしてねえだろ!!」

「まだってことは何かするつもりだったんだな?」

「・・・それは言葉の綾だ、ちよーつとだけ芸を披露して路銀でも貰おうかなって」

「路上でやるのならわれらガネーシャファミアリアかギルドに申請は出してるんだろ?」

当然今さつき思いついたことなので出してるはずがない。

わざとらし口笛を吹くポロン。

警備員はため息をつき、「一応警備員待機テントに連れていく」と言った。

だが、祭りを楽しみにしているポロンとしてはこのまま連れて行かれても説教&説教だということを理解していた。

そこでポロンはまた嘘をつくことを考えた。

「おい、大変だよ!! そういえば今回の祭りで捕まえたモンスターが逃げたつてさつきぶつかつたやつが騒いでたんだ」

「そんなわけないだろ、ちゃんと調教されたモンスターを使用してるし、ちゃんと監視だつてついでる」

「本当なんだ信じてくれ!!」

「あーもう、いい加減に」

警備員がポロンに言い返そうとすると数多くの叫び声がかかります。

その叫び声の中に確かに聞こえたのだ・・・「モンスターが脱走した」と。

「おい小僧!! 早く非難しろわかつたな!!」

そういつて悲鳴が上がったほうへ警備員は走っていった。

「おっ、おいらもすぐにげなきや!!」

悲鳴が上がったほうに背を向けるが足が動かない。

(みんなこの祭りに参加してるレフイーヤもゴブさん、アルちゃん、バツくん、ファミリアのみんな)

(いやいや、おいらはレベル1の最弱冒険者、いったところでモンスターを倒せない)

ポロンは自身に無理だと強く言い聞かせる。

言っても死ぬただだ、行くだけ無駄だと。

「ママー!!!ママー!!」

「うわああああ!!!」

「どけ!!そこからさっさとどけ!!!」

この阿鼻叫喚を前に足が震えてくる。

初めてモンスターと戦った時以上の恐怖が自信を襲う。

「よっよし、にげっ!？」

一歩踏み出して再び足を止めてしまう。

(なんだよ・・・なんだってんだよ!!!)

ポロンを襲ったのはただただ嫌な感覚だけだった。

悪寒と例えたほうが正しいだろうか。

「・・・クソツ!!」

そしてポロンはその場で振り向き、逃げてく民衆とは逆方向に走っていった。

く 出店が並ぶ広場く

「何なのあいつ!?へび!？」

「あんなの見たことないわよ!？」

レフイーヤ、ティオネ、ティオナの三人は地面から現れた緑色のへびのようなモンスターと対峙していた。

「私たちが惹きつけるからレフイーヤは詠唱を!!」

「レフイーヤ任せたよ」

「はっはい!!!」

見たことのないモンスターに少々驚くがティオネの指示通り、レフイーヤは魔法の詠唱準備にかかった。

「解き放つ一条の光 聖木せいぼくの弓幹ゆがら 汝 弓の名手なり 狙撃せよ 妖精しやしゆの射手 穿て
必中の矢」

詠唱が唱え終わるその時だった。

緑色のへびのようなモンスターはティオネ、ティオナを無視し、レフィーヤの方に襲い掛かってきた。

(魔力に反応して!?)

へびの攻撃は素早く、回避する余裕もない。

だが重い衝撃より先に何者かに押し倒された。

「あつぶね、間髪だつたぜ」

「「ポロン!」」

レフィーヤを押し倒したのはポロンだった。

「言つとくけど助けるためにおいらはレフィーヤを押しただけだからな!!あとでお仕置きとかそういうの無しだぜ」

「そんなこと言わないけど、それよりどうして来たんですか!?!」

「なんでって、おいらがこの騒ぎを収めてみんなからの称賛を得るために決まってる」

レフィーヤにはポロンが強がっているのがわかった。

口元は笑っているが全身が震えている。

「怖いんでしょう!! だったらすぐ逃げ!!」

ヘビのモンスターが出てきた時のように再び地震が起こる。

すると地中から巨大な花が現れる。

「こいつらヘビじゃなくて花だったの!?!」

食虫植物のごとく口を大きく開けて叫びをあげる。

「なにこれ邪魔!!」

ツタやツルがレフィーヤたちの方へ行くことを邪魔する。
そんな中、花は身動きが取れないレフィーヤたちに近づいていく。

(発動を中断させちやつたからまた一から詠唱しなきゃ魔法は撃てないし、魔力を集中させれば一斉にこつちを狙って来る)

「ポロンだけでも逃げて!!」

「いや、大丈夫みたい」

「何を・・・」

その時、レフィーヤが耳にしたのは風の音だった。

何度も聞いたことのある音。

(ああ、また私・・・)

こつちに迫ってきた花はポロンたちの目の前で縦二つに割れる。

(あの人に守られる)

「もつと早く来てくれよ姫さん」

「ごめんね?」

緑色の風を纏った戦姫がポロンたちの前に降り立った。

〈 e p i s o d e 6 e n d 〉

episode 7 再会

「アイズ、そいつは魔法に反応するからな!!!」

「魔法・・・わかった」

ポロンはアイズにそれだけを伝えた。

「テンベスト目覚めよ」

「アイズさん!!!魔法を使ったら!!!」

「いやいい、今の内に動くぞ」

そこからポロンはレファイアの手を引き、ここに来る途中で目に入った女の子を持ち上げる。

「とにかくこいつを安全なところに持ってくぞ」

「はっはい」

ポロンとレフィーアが戦線を離脱するためにもあえてアイズは魔法を使うことを選んだ。

「アイズ!! 私たちはあとでいいからまずは一匹何とかしちやいなさい」
「わかった」

残り二体の食人花。

風を使い空中を高速で移動する。

食人花が繰り出す無数のツルにも空中での回避や斬撃でいなしている。
纏う風に魔力を送り、剣先に集中させる。

「リル・ラフアーガ」

アイズの放つ一閃に食人花は崩れ去った。

「やった!!!」

「さすがね」

「もう一体……」

アイズは再び剣先に風を集中させる。

鞭のようにしなせさせたツルをよけながらテイオナ達が捕まっている食人花に近づく。近づくにつれツルは勢いも増すがアイズには勝算があった。

(ここまで近づけばツルごと本体まで貫ける)

「これで終わり、リル・ラフアーガ」

再び風を纏った一閃が繰り出されるがここで不測の事態がおこった。

「!?!」

2本のツルを貫いたところで剣が壊れたのだ。

そのままアイズの攻撃は中断し、3本目のツルによる一撃を受けた。

「アイズ!!!」

アマゾネス姉妹はアイズの名前を叫び安否を確認する。

「だい・・・じょうぶ・・・」

近くの出店に吹き飛ばされたアイズだが魔法のおかげで致命傷は抑えられた。だが内心は少し焦りを感じていた。

自身の手には武器がなく、いつまで自身の魔法が持つかもわからない。

まだ魔法を展開しているアイズに再びツルが襲い掛かる。

そんな中で急に食人花の口にあたる部分で小さな爆発が起こる。

「どうだ!!!おいら特性花火玉の威力!!!」

「ポロン!!!」

「レフィーヤは女の子を連れてこの場から離れた!!!あと助っ人だ!!!ゴブさん、アルちゃん頼む!!!」

「ゴブ!!!」「キュキュ!!!」

ゴブさんはティオナを、アルちゃんはティオネを拘束しているツルを攻撃した。

「ありがとうゴブさん」

「ナイスよアルちゃん」

アマゾネス姉妹はそれぞれゴブさん達から武器を借り、反撃にでた。

「さあて、反撃開始と行こうかしら」

「武器があるから今度は負けないよ!!!」

二人は着実にダメージを与えていったが決定打には至らなかった。

ゴブさん達の武器はあくまで上層で通用するレベルの武器の為、この食人花を倒すま
では至らなかった。

「チツ、無駄に硬いのよ」

「ウルガさえあればこんなやつ」

「二人ともおいらに任せてくれ」

ポロンは二人に声をかけると懐から刀身の赤い短剣を取り出した。

「ヴェルフ特性壊れない魔剣バージョン52!!」

「あんたなんでクロツゾの魔剣なんて持ってるのよ!？」

「企業秘密だ」

ポロンは数年前からヘファイストスファミリアのヴェルフ・クロツゾとともに壊れない魔剣の製作を研究していた。

皆さんもとても気になるようだがここは後日紹介しよう。

「バージョン52は今までとは打って変わった方式をとったチャージ式の魔剣」

「魔剣内部に魔力がチャージされることで強力な炎魔法に匹敵する一撃を放つことができる代物だ」

「そして今のところ計9回目の使用となるがまだ壊れておりません」

ポロンの持つ魔剣の刀身がさらに赤みを増す。

その魔力に反応し食人花も動き出す。

「へへっ、今更動き出したところでもう遅いつての!!!」

「必殺!!!バージョン52砲!!!」

「技名雑!!!」

巨大な炎が魔剣から放たれ、ポロンを襲ったツルを巻き込みながら燃えていった。

「おおー10回目も耐えきったか・・・これはヴェルフにいい知らせができた」

「やったじゃんポロン!!!」

「はあくあとですべて話してもらおうからね」

食人花は消滅し、皆そろって安堵した。

「ポロン、危ない」

「そつちこそ剣が折れてピンチだったじゃんか」

「・・・足震えてた」

「・・・ゴブニユのおっちゃんどんな顔するだろうな」
「!?」

今回はいつもの愛用の剣は修復に出しており、ゴブニユファミリアに替えの剣を貸してもらっていたのだ。

ポロンの一言を聞くと誰が見てもわかるように顔が青くなっていた。

「はあく・・・おいらも一緒に謝るからこれでお相子な」

「うん・・・ありがとう」

この場を離れようとする一同だったが一番耳のいいアルちゃんが地下から異常な音がすることに気づく。

「キュキュ!!!」

「なっ!?!」

あるちゃんの声でポロンが後ろを振り向くと一本のツルがポロン目掛けて迫ってい

た。

ポロンはいきなりの出来事に身動きが取れずツルの一撃が命を奪いに来ていた。しかしそんなポロンの体を突き飛ばした人物がいた。

「アイ・・ズ？」

「・・・よかった」

アイズは腹を貫かれ、そのまま壁に叩きつけられた。

「ティオナ!!!」

「わかってる!!!!」

二人は次々と襲ってくるツルをいなしていった。

「まさかもう一体隠れてたなんて」

「ポロン!!もう一度魔剣を!!!」

「多分無理よ、さつきチャージ式とか言ってたでしょう!!!」

テイオナは再び魔剣を使ってもらうようポロンに声をかけるがテイオネの言う通り、それは不可能だった。

バージョン52は魔剣内部に特殊な魔石を埋めており、そこに魔力を充填させて使用する仕組みになっている。

だが一発の使用に対し、チャージは3日以上かかると燃費が悪い。

つまり、先ほど使用したためバージョン52は現在使えないのであった。

だがテイオナの声はポロンに届いていなかった。

ポロンは震える足を動かし、傷つくアイズのもとに近づく。

「なあおい・・・大丈夫だよな」

「・・・・・・・・」

アイズからの返事はない。

「ロキファミアでも最前線のアイズがこんな簡単にやられるわけがない」

「・・・・・・・・」

アイズの横たわる地面の血だまりが次第に広がっていく。

「……どうしておいらを庇ったんだよ!!!!」

「……」

その問いにも返答はない。

「アイズ……さん？」

「アイズさん!!!!」

遅れてきたレフィーヤがアイズの悲惨な状況を見て駆け寄った。

「そんないやああああああ!!!!!!」

レフィーヤが叫ぶ。

レフィーヤが泣く。

ポロンはレフィーヤの姿を見てプツンッと何かが切れた感じがした。湧き上がってくるのは食人花に対する憎悪。先ほど使ってしまった魔剣を構え、走り出す。

(あいつを絶対クロス)

「うおおおおおお」

「ちよ!?!ポロン!!!」

「来ちゃダメ!!!」

そして何の策もなしに突っ込んだポロンは食人花のツル一撃を食らい、アイズとはまた別の壁に吹き飛ばされた。

そしてみんなの呼びかけにも答えられず意識を失った。

く???
??? : ポロン視点く

夢を見ていた。

「……い」

アイズがやられておいらもやられて。

「……い、おき……ば」

でも大丈夫、だってあれは夢なんだからさ

「いいか……し……ぶっ……ば……ぞ」

ん〜うるさいな、あと五分寝かせてくれ。

「うるせえ!!!とつとと起きろ!!!」

「あでえ!!!いきなり何すんだよ!!!」

「もお〜やりすぎよ」

頭を殴られ、目を開けるとツンツンした黒髪の男と可愛い黒髪の女がそこにいた。

「失礼美しいお嬢さん、お名前は？」

「えっポロン覚えてないの？」

「なんだ、まだ思い出してねえかよ」

何言ってるんだこいつらと思っても仕方がない。

オラリオで会ったことあるっけ？

いや、二人とも見たら忘れられない鎧と服だしな。

黒いライオンの鎧なんてめったに見ないぞ。

「だあああ!!! あんたたちは誰なんだよ!!! それにここどこ!!!」

今俺は何もない真っ白い空間にいる。

自室でもオラリオの中でもない。

「オイラ達も詳しいわけじゃないがお前の精神世界ってやつだ」

「おいらの真似すんじゃねえ!!!」

「おめえが真似てんだよ!!!」

「時間がないからケンカしない!!!」

「あでえ!!!」

おいらとツンツン頭は女の子から軽いチョップを受ける。

「ん？時間がないってどういうこと？」

「お前さんあの魔物から一撃くらって気絶してるんだけどよ」

「魔物？」

「あのでっかい魔法に反応する植物よ」

はっ？だつてあれは夢……じゃない!?

「早くあいつを!!!」

「ああ、だからお前をここに呼んだんだよ」

「私達の力も使えるはずなのになんで使わないのか聞こうと思ったんだけどまさか記憶

がないとはね」

「……何言ってるの？」

二人して溜息を吐いた。

そんな二人を見て怒りがわいてくる。

「いい加減にしろ!!このままじゃアイズが!!!」

「だったらここで思い出せ」

「何を……」

「私達の旅を」

「オイラ達の戦いを」

「賢王としての記憶を」

ズキリと頭痛が襲う。

『賢王』のフリーズをきっかけにどんどんと記憶があふれてくる。

「ああああああああ!!!」

「ちよっ!? 大丈夫なの!!!」

「ありや、無理に思い出させようとしちゃって大変なことになってる?」

「もう、何やってるのよキラ」

「おい、ヤオだつて賛同してたじゃねえか!!!」

キラ……ヤオ……

《さあ、あと一歩だポロン!!! がんばれ!!!》

「……アルス」

自然と口から出た名前だった。

いや……すべて思い出した。

「俺は聖戦士 賢王ポロン」

「よーやくかよ」

「改めて久しぶりポロン」

ああ、なんで大切な仲間のことを忘れていたんだろう。
自然と涙が頬を伝う。

だが悲しくはない、とてもうれしい。
俺は笑顔で2人に声をかけた。

「キラ、ヤオ、久しぶり」

〈 e p i s o d e 7 e n d 〉

episode 8 覚醒

「そんなポロンまで・・・」

「レフィーヤ!!!とにかくアイズを連れてこの場から引いて!!!」

「アルちゃん、ゴブさんはポロンをお願い!!!」

ティオナ、ティオネの声にレフィーヤ達は気持ち切り替え各々行動し始めた。だが現状では食人花を倒す術がなく、ヒリユテ姉妹は苦渋の表情を浮かべる。

「もう誰でもいいから助けに来て〜!!!」

「その意見、私も同意だわ」

「なら俺に任せとけ!!!」

「「え?」」

その声にレフィーヤとヒリユテ姉妹も反応しポロンが倒れてた場所を見る。

先ほどまで倒れていたポロンが立ち上がっており、ニヤツとした笑みを浮かべていた。

「「ポロン!?!」」

「ゴブツ!!!」

「キュ〜!!!」

「みんな心配かけた、ポロン様復活!!!」

急に復活したポロンに驚愕する一同。

そんなみんなを気にせずにポロンは暢気にストレッチを始めた。

「あんたふざけてないで動けるんだっいたら早く逃げなさいよ!!!」

「本当に死んじゃうよ!!!」

あまりの緊張感のなさに怒りを覚えるティオネに本気で心配するティオナ。そんな心配をよそにへらへらしながらポロンは食人花を見る。

「安心しなよ、こいつは俺が倒すからさ」

「ゴブさん達も少し離れてな」

ポロンは目を閉じ、頭のサークレットに手をかけて持ち上げた。

いままで外れなかったサークレットをいともたやすく外し、そのサークレットはどんどん縮退し指輪となった。

するとポロンの周囲から風が吹き出す。

「っ!?!ポロンから魔力が」

魔法を使うレフィーヤはポロンの体から魔力を感じた。

今までは違うポロンに再び驚愕する。

そのポロンの体にも少し変化があった。

結膜は黒く、角膜はポロンと同じ翡翠色の少し不気味な目が額に現れたのだ。

「これで賢王完全復活だな」

「さてまずは念のため『ピオラ』そして『スカラ』っ」と

自身に移動速度を上昇させる呪文『ピオラ』と守備力を上昇させる呪文『スカラ』をかけた。

呪文を使用したことで食人花がポロンの魔力に反応し始め攻撃してくる。

「よっ、はっ、ほいつ」

移動速度の上があった今の状態のポロンは繰り出されるツルを気軽によける。

「テイオネ達は戦線離脱してくれ、俺の魔法であいつを焼き尽くす」

「はあ!? あんた魔法使えないでしょうが!!!」

「今使えるようになったんだよ!!! いいから離脱しろ!!!」

「くっ・・・テイオナ」

「わかった!!!」

2人は食人花の攻撃を捌きつつ、距離を取り始める。

そして十分な距離を離れたのをポロンは確認した。

「さつきはよくもやってくれたな花野郎!!!俺の炎で燃やしてやるぜ!!!」

ポロンはツルを避けながらも呪文を発動させるべく自身の魔力を集中させる。

「こいつで終わりだ!!!上級火炎魔法『メラゾーマ』!!!」

「.....」

「.....」

「.....」

しかし何も起こらなかった。

「あれ?べぶしっ!!」

何もせず立ち止まってしまったポロンに容赦なくツルの鞭が繰り出された。

吹き飛ばされはしたものの呪文で守備力を上げていたのでそこまで大きなダメージは受けなかった。

「何ふざけてるんですか馬鹿ポロン!!!」

「ふざけてないんだけど、なんでメラゾーマが使えなかったんだ・・・あつ」

ポロンは精神世界で受けた説明を思い出した。

くくくく数分前：ポロンの精神世界くくくく

「時間がないから手短に話すとポロンはスキルでオイラ達ケンオウの力というか技能みたいなのが使えるみたいなんだ」

「えっ!?!じゃあ剣をキラのように使えたり、ヤオみたいに気を使った攻撃ができるってことか」

「そうよ、私達がポロンの精神世界にいるのもそのスキルの影響みたい」

もはや俺最強なんじゃねと思うポロン。

しかしその雰囲気ギラ達に伝わったのか二人から注意を受ける。

「だけど気をつけろよ、お前は異魔神との戦いでマダンテを使って命を落としてこつちに来た」

「そう、この世界で生を受けて今日まで育ってきたから当然元の世界とは違う体なのよ」「異魔神!? そういやあいつはどうなったんだ!!」

ポロンの思い出した記憶では異魔神に対して究極魔法マダンテを放つところで途切れてた。

だからあの後自身がどうなったかも覚えていなかったのだった。

「知らね(ないわ)」

「・・・は？」

「私達はポロンの記憶にある私達をスキルで具現化した存在だから本当の私達ではないのよね」

「だからポロンが記憶にないことはオイラも記憶にないってことだ」

「なるほど・・・」

ヤオの説明に納得するもモヤモヤした気分は晴れない。

「まあその話は置いてもうほんとに時間が無いから最後に言うけど、あなたはこの世界のポロンで前の世界のポロンとは容姿は同じでも全く別の体って考えなさい」

「あとオイラ達の力が使えるって言ったけどあくまで技や技能を模倣できるようになるだけだから鍛えてない今の状態じゃロクな技は出せない」

「呪文も同じで簡単な呪文ならまだしも練習もしてない状態だと全然使えないからね」

ポロンはそこまで聞くと次第に目の前が少し歪んでいくのを感じた。

「あれっ目の前がゆがんできたぞ」

「時間切れか・・・まっ言いたいことは言えたしがんばれよポロン」

「本物の私達とは違うけどいつでもあなたの中で応援してるからね」

「ありがとうキラ、ヤオ」

こうしてポロンは精神世界から現実世界に戻ってきたのだった。

「つてさつき言われたばっかだったわ、ガハハハッ」

と気楽に笑いながらポロンは言った。

「いい加減にしないと潰すぞ（怒）」

「あっはい……」

ティオネにガチトーンで言われ、ポロンは青い顔で頷く。

自身の股間を守るためにもまじめにやろうと誓った。

「多分メラミも使えんと思うから『メラ』!!!」

ポロンが呪文を唱えると手のひらに炎の球が出現し、食人花めがけて放たれた。

ポロンが使用したのは火球を放つ呪文『メラ』、先ほど使用できなかった『メラゾーマ』の2ランク下の呪文だ。

「本当にポロンが魔法を使った……」

「しかも無詠唱だなんて……」

「だけど全然効いてないみたいだよ」

ティオナの言う通り食人花に傷をつけるほどのダメージはなかった。

レフィーヤ達から見たら低レベルの魔法使いが使うファイヤーボールと同じぐらいだと感じていた。

「やっぱメラだけじゃ厳しいか……なら」

再びポロンは魔力を練る。

「右手にメラ、左手にもメラ」

ポロンの両手に赤い光が灯る。

『メラ×2』だ!!!」

先ほどより一回り大きい火球が放たれた。

その火球がツルを燃やし、そして本体に当たり表面を焦がした。

「効いてる!!!」

「すごいよポロン!!!」

「だけど倒すまでの火力がない……」

先ほどより多少威力が上がったただけじゃ倒せない。

それがティオネの考えだったが、ポロンの考えは違った。

「2つでダメなら5つでどうだ」

再び魔力を練り始める。

(同じ呪文を5つも重ね合わせるのなんて初めてだけど異なる5属性を重ね合わせたマダンテに比べれば簡単すぎるぜ)

「5つ掛け合わせたメラをさっきの火球と比べんなよ」

ポロンが両手を上げると先ほどとは比べ物にならない巨大な火球が出現する。

「燃え尽きろ、『メラ×5』!!!」

両手を振り下ろすとその火球は食人花に向かって放たれる。

食人花は直撃を避けるためかツルを出すもすべて燃え尽きてしまう。

「おまけでプレゼントだ!!! 『バギ×2』!!!」

ポロンがさらに風属性の呪文である『バギ』を2つ重ね合わせた呪文を発動させると、強力な突風が食人花に向け放たれた。

延焼している食人花に風を送ることでさらに火力が上がリ、瞬く間に燃え尽きていった。

「賢王様にケンカを売るなんて2万年早いぜ」

ポロンは振り返り、レフィーヤ達の方へと歩みを進めた。

「さて、アイズの傷を治すか、ってどしたのみんな」

「あんた本当にポロン？」

「失礼な、正真正銘ロキファミアリアのポロン様ですよ」

一同はポロンの急激なパワーアップに驚愕して固まっていた。

「ポロンってレベル1なんだよね」

「そうだけど、今はそんなことよりアイズを何とかしなくちゃな」

ポロンはレフィーヤにアイズを地面に寝かせてとお願いし、レフィーヤはそれに従っ

てアイズを寝かせた。

「ベホマはまだ使えんだろうから『ホイミ×5』」

ポロンが回復呪文である『ホイミ』を5つ掛け合わせたものを使用するとアイズを緑色の光が包んだ。

すると腹部の出血が収まり傷が消えた。

「『回復魔法!?!』」

「うへえ、ごっそり魔力持っていかれんな」

傷がふさがったのを確認するとポロンはその場に腰を下ろした。

「ゴブゴ・・・」

「キュキュ・・・」

「大丈夫だ、心配してくれてサンキュー、ちよつと魔力使い過ぎただけだからすぐよくなるよ」

心配して近づいたゴブさん達に対し、ポロンはサムズアップし笑顔を向ける。

「キキー!!」

「みなさーん、ご無事ですかー!!」

「おっ、この声はバツくとエイナさんか」

この後、バツくんが連れてきたギルド職員であるエイナ・チュールがガネーシャファミリアと共にやってきて、事のあらましをポロンが説明した。

ポロンはレベル1である自分が倒したと知られるとかなり面倒なことになると感じ、自分ではなくレフイーヤが倒したことにした。

「ってかんじでレフイーヤが炎魔法で植物モンスターを焼き尽くしたんすよ」

「なるほど・・・ところでポロン君その額の目は何?」

「エツ!?!」

エイナはポロンの額の目に疑問を抱き質問をかけると、ポロンは少し焦った。

(ヤベツ、サークレットかぶり忘れた)

「いや〜メイクっすよ、今日の祭りに乗じて大道芸で稼ぐためにメイクしたんすよ」

「メイク〜?」

「本当ですって、あつエイナさん後ろ!!」

「えっ、何かあるの?」

エイナが後ろを向いた瞬間にポロンは小さく『モシヤス』と変身呪文を唱え、額に目がない状態の自分に変身した。

「もう、なにもないじゃないってあれ?」

「ねっメイクだったでしょう」

エイナは少し腑に落ちないようだったがこれ以上は気にかけてなかった。

ポロンは一安心し、事情を話し終えたことで一人誰にも気づかれずに帰ろうとする。すると両腕を二人の人物に抱き付かれる。

「さあてポロン、じっくりと話を聞かせてもらおうわよ」

「ごめんねポロン、おとなしくついてきてね」

「レフィーヤたすけ」

「私はアイズさんを運ばなきゃいけないので・・・ごめんなさい」

「お前たち・・・」

ポロンはゴブさん達に助けを求めるが皆そろって顔をそむけた。

「さあホームに戻ってからすべて吐いて貰うわよ」

「・・・はい」

両腕の柔らかな感触を感じつつもこれから起こるお話しんもんに対し、顔を青くするのであった。

episode 8 end

episode 9 レベルアップ

ポロンたちは一行はホームに戻り、幹部メンバーとアイズを除く一軍メンバーがロキの部屋に集まる。

一同がそろったところで事のあらましを話した。

「ポロンが魔法を使っただと？」

「嘘はついてへんみたいやな．．．」

「だからロキにも伝えたのよ」

ポロンが魔法を使用したことに驚くりヴェリア。

ポロンが魔法を使ったという確証はロキがいることで取れたがベートは納得できなかった。

「こいつがバカゾネス達が苦戦する程のモンスターを葬っただと？」

「やんのかバカ犬」

「上等だゴラア」

「いまはケンカしてる状況じゃないだろう・・・が」

リヴェリアは2人の喧嘩に対し注意をし、話題となる人物に目を向けるが・・・

「くかくむにやむにや」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

逃げないようにと拘束され、椅子に括り付けられながらぐつつりと眠っているポロンがいた。

「むにやむにや・・・へへっそんなには食べられないってば〜」

「ポロン・・・」

「むにやむに・・・フッフッフ、レフィーヤここが良いのかほれほれ」

「なんて夢見てんですかこの変態!!!」

「なんて夢見とるんだこの馬鹿者!!!」

「ばらもすっつ!!!」

レベル3の平手打ちとレベル6の拳骨、会心の一撃。

「いって〜!!!何しやが・・・レフィーヤさん？ちよつと落ち着いデボラツ」

ポロンはレフィーヤに胸ぐらを捕まれ、ひたすらピンタされた。

そして・・・

「あー・・・ポロン平気かい？」

「こりえこれがが大大丈丈夫夫にに見見ええるるか？」

「ガハハハ、元気そうで何よりだ」

頭にタンコブをつけ、頬がリスのように大きく腫れた状態になっていた。

口元が晴れているせいで呂律が回っていないが、案外元気な状態だったのを見てガレ
スは笑う。

「んん、本題に戻すけどポロン、君が魔法を使ったのは本当かい？」

「私も気になってる点がある、無詠唱の魔法を使用したと聞いたのだが本当なのか？」
「ああ、ひょんとうら^{あ、本}だ」

「・・・誰かポーションを持ってきてくれ」

呂律が回らないポロンを見てフィンはポーションを持つてくるよう指示する。
フィンの指示でハイポーションが持ち込まれポロンは元の顔に戻る。

「おいロキ!!本当にこのバカはレベル1なのか!!」

「そうね、あれだけの魔法を使ってレベル1ってのは正直考えられないのよね」
「そないなこと言うてもな」

ロキに真相を言うように迫るベートとティオネ。

しかしロキ自身もポロンについてはよくわかってない。

フィン達以外に隠していることはレベルと文字化けしたスキル欄のことだけがそれ
だけしかロキ自身にも情報がない。

「確かにポロンのステータスについて隠していることはあるんやけどな、うちらも詳細は

わからんのや」

そう言つてロキは前回写したポロンのステータスを全員に見せた。

「レベル0ですつて!?!」

「それにスキルの欄全然読めないね」

「そんな・・あり得ません!!!」

「なるほど、だから訓練とかしてもなんも伸びなかつたのか」

「おめえはなんでそんなお気楽なんだよ」

ポロンのステータスに各々反応を見せるもお気楽な態度のポロンにベートはツツコミを入れる。

「ん〜多分だけど今ステータス更新したら多分色々解放されてるんじゃないやね?」

「それはどうしてかなポロン」

「切っ掛けがあつたからだよ团长様」

切っ掛けと聞き、幹部組は眉を動かす。

ロキも思うことがあったのか真剣な顔つきになる。

「どうする？今ここでステータス更新でもしよつか？」

「だああああ!!!ポロンの口車に乗ったるわ!!!」

先ほどからおちやらかなるポロンにロキは警戒していたがそれを諦め、ポロンのステータス更新をすることを決めた。

「ほれ、さっさと脱げや」

「・・・優しくしてね」

「本気でどついたらるか？」

「ジョークだよジョーク」

ヘラヘラとしたポロンは服のボタンを外し、上半身を露出させ、ロキの方に背を向ける。

ロキは針を使って人差し指から血を出し、その血でポロンの背中をなぞる。

すると何も描かれていない背中にロキファミリアのエンブレムといくつかの文字が現れる。

その文字は神聖文字ヒエログリフと呼ばれ、神たちの使う文字であり、下界でこの文字を読める人間は数少ない。

ロキはポロンの背中に浮かび上がる神聖文字を読むと目を見開き驚愕する。

「ハアアアアア!?」

「どうしたんだいロキ?」

「レベルアップできるやと!」

「!?!」

何年も変化のなかったはずのステータスだったがレベルアップ可能という結果に幹部メンバーにロキも驚愕していた。

「レベルアップでおなじやす」

「わかったで……ってハアアアア!」

ポロンの要望通りレベルアップさせると再びロキは声を上げる。

「ん? どう? なんか変ついでで!? ロキ!? 無理やり首を曲げるなよ!!!」
 「ポロン!? お前一体何もんや!!! 全部白状せい!!!」

ポロンはステータスを確認しようとロキに声をかけるも頭をロキに捕まれ無理やり顔を正面に向けさせようとしていた。

「こんな出鱈目なスキルあつてたまるかいな!!!」

「無理!? それ以上首は曲がんねええええ!!!」

「ええ加減白状せええええ!!!」

ゴキツと鈍い音が部屋に響いた。

「「「「「「「あっ」」」」」」」」

ロキが頭を放すとゆっくりとポロンの体は倒れていった。

「ハハハツ・・・スマン」

「・・・みんな今日は解散だ」

「私はポロンを医務室まで連れて行く」

「頼むよりヴェリア」

そして一同は翌日また話し合おうということで本日は解散となった。

ロキは申し訳ないと思うつつ医務室に運ばれる前に写したポロンのステータスを見る。

「ポロン、ほんまナニモンなんや・・・」

ポロン

種族？人間

L v . 1 (0)

力? I 0

耐久? I 0

器用? I 0

敏捷? I 0

魔力? I 0

《魔法》

【初級呪文】

火炎呪文 『メラ』

灼熱呪文 『ギラ』

爆裂呪文 『イオ』

氷結呪文 『ヒヤド』

風塵呪文 『バギ』

【中級呪文】

【上級呪文】

【回復呪文】

小回復呪文(単)『ホイミ』

毒回復呪文『キアリー』

睡眠回復呪文『ザメハ』

【補助呪文】

守備力上昇呪文(単)『スカラ』

守備力減少呪文(単)『ルカニ』

速度加速呪文(単)『ピオラ』

速度減速呪文(単)『ボミエ』

防吹呪文『フバーハ』

変身呪文『モシヤス』

睡眠呪文(単)『ラリホー』

混乱呪文(単)『メダパニ』

幻惑呪文『マヌーサ』

封魔呪文『マホトーン』

移動呪文『ルーラ』

脱出呪文『リレミト』

【究極魔法】

《スキル》

【賢王】

異世界にて魔道を極め、世界を救った聖戦士に送られた称号。

- ・ 異世界で使用していた魔法が使用可能
- ・ 魔法使用による魔力値の上昇量増加
- ・ 他者の魔法を完全熟知により模倣可能
- ・ 同種または異なる属性を持つ魔法を合成可能

【戦友団結】
エターナル・ボンド

異世界で世界を守護するために仲間と共に敵へと立ちむかった。

たとえ世界が違えども共に命を預けた仲間との絆は決して消え去ることはない。

- ・ かつての仲間の技能や技術をトレース可能

- ・ 剣王キラ（トレース可）

- ・ 拳王ヤオ（トレース可）

【魔物指揮】
モンスター・タクト

- ・ 悪意のないモンスターに対し自動起動
- ・ 対象モンスターに対しての言語理解
- ・ 指揮をとることで対象モンスターのステータス上昇

【転生新話】
アナザー・ストーリー

- ・ 前世の記憶を保持
- ・ 前世での技能をトレース
- ・ 早熟する

） e p i s o d e 9 e n d ）

episode 10 転生

「さあ、洗いざらい吐いて貰うでポロン」

「僕としても気になる点がいくつもあるからね」

「ふむ、賢王か・・・詳しく聞かせてもらおうじゃないか」

「私も気になる」

昨日と同じ部屋にポロンを中心にロキ、フィン、リヴェリア、アイズと囲まれている。

「別に気にしなくてもよくない」

「「よくない」」

声をそろえて四人は否定した。

ポロンはめんどくさいと思いつつも話すことを決意した。

「・・・このことは違う世界で命を落とし、なぜか別の世界で新たな命として生まれた男が

いた」

「それが君なんだねポロン」

「異世界からの転生か」

ポロンがゆつくりとまるで物語を読み聞かせるように話した。

「前の世界はこの世界と同じように魔物と呼ばれるモンスターがいてそれを率いる王、魔王が存在する世界だった」

「魔物を率いる王・・・」

「しかも一体だけじゃなく四体もいてさ、そいつらとまあ当時の俺は戦ってたってわけ
「よ」

ポロンは次々と語っていく。

共に旅した仲間のことや、壮絶な冒険、魔王たちとの壮絶な戦い。

「まあ、そんなこんなで俺は賢王ポロンとして世界の命運を分けた戦いに参戦してっただけさ」

「ちよつとまちいや」

「ん?なに?」

「ポロン・・・まだ隠しとることがあるやろ」

ポロンの話してる内容は全て嘘偽りないことはロキには分かっていたが嘘ではなくポロンが話そうとしない内容に気づく。

「・・・」

「自分から言いにくいんやったらウチが聞くで、・・・前世の死因はなんや」

「本当にそれ聞いちやう?」

ポロンはこの時、自身の死因については話したくなかった。

いくつか理由があり、一つはマダンテが知られること。

マダンテはポロンの中で最強の技の一つであり、自身の命をも削つてしまふ究極の呪文。

この世界での切り札として誰にも明かさずにいたいという理由。

二つ目の理由はそのマダンテが原因で死んだことを知られたくなかったからだ。

ポロンはこの世界でも仲間を救うためだったら惜しげもなくマダンテを使う。

それが知られるとフィンはまだしも過保護なリヴェリアは絶対にずっと目を光らせることになると考える。

それが一番まずいとポロンは感じていた。

リヴェリアに知られることでダンジョンはおろかプライベートまで監視されることになってしまうと考えた。

(それだけは絶対に嫌だ!!!)

「・・・実は魔王たちが真の敵じゃなくてその魔王たちに力を与えていたやつがいたんだよ」

「なんだって!?!」

「魔王より強い存在・・・」

これまで話した内容から4体の魔王がどれだけ凄まじかったのかを理解しているからこそ、それよりも上位の存在がいることに四人は驚愕した。

「異魔神、名の通り魔王を動かしていた神様だったんだがこいつが強くてな」

「大地を一瞬で凍結させたり、星を落としたり、傷つけても再生すると大盤振る舞いでやっ」

ポロンが話す敵を想像し、全員顔を青ざめる。

「俺も頑張ったんだけどさその時に・・・ね」

「魔神との戦いで戦死したというわけか」

「こんな空気になるから話したくなかったんだよ・・・はい、この話はこれでおしまい」

パンツと手を叩き、そのまま部屋を出ようとするポロン。

しかしポロンの両肩に手が置かれる。

「まだ用は終わっていないんだが」

「魔法見せて」

リヴェリアとアイズに肩をつかまれる。

当然レベル5とレベル6につかまれたら振りほどくこともできない。

「……はー」

ポロンは渋々と部屋を出て練習場に足を運ぶことになった。

　黄昏の館：練習場

　ところ変わってここはホーム内にある練習場だ。

　レベル1などの初心者いきなりダンジョンで行かせる前にここで戦い方を指南してからダンジョンにチャレンジさせている。

　ポロンも随分お世話になった場所であった。

「それじゃあ準備した的に対して魔法を使ってくれ」

「はーい」

　フィンの指示により的の付いたかかしに手をかざす。

「じゃあ、『メラ』」

ポロンが呪文を唱えると手のひらから火の玉が出現し、すぐさま目標の的めがけて放たれる。

「ふむ、無詠唱とはいえ上層なら牽制では使えそうか」

「ゴブリンぐらいなら気をそらせそうだね」

「あ?」

弱い魔法だと遠回しに言われ、少しカチンツときたポロン。

「だったら見せてやろうじゃないか賢王の魔法を!!!」

「メラの五つ重ね『メラ×5』じゃ!!!」

特大の火炎を先ほどの的めがけて放つ。

そして当然のごとく、的だけではなくかかしも燃え尽きそこには高い火柱が立つ。

「ガハハハッ、どんなもんだい!!!」

「やりすぎだ馬鹿者!!!」

「アデツ!!!」

リヴェリアから拳骨を食らうポロン。

「これがスキル『賢王』に書かれていた魔法を合体させるつちゆうことか」

「ああ、これは強力すぎる力だね」

ロキとフィンはポロンのスキルの重要度を改めて思い知り、今後のファミリアとしてどのように対処するかを考え始める。

「まあ少しやりすぎちまったが安心してくれ」

「どこに安心する要素がある」

「まあまあ、俺も馬鹿じゃないからさ、なるべく魔法も制限しながら使っていくよ」

「そうしてもらえるとこつちも助かるよ」

「さすがに神達に知られたらたまったもんやないしな」

この世界では珍しいスキルや魔法を持つている者は神々のいいおもちゃとされてしまいうケースが多い。

一応ロキファミリアという最大派閥のファミリアに所属してはいるが誘拐などの被害を考え、珍しいステータスは秘匿にするほうが好ましいのである。

「一応この世界の俺はキラやヤオの力も使えるみたいだからな、そつちを鍛錬して技をものにしてみるさ」

「前世の仲間であるケンオウの二人の事か」

「そそ、剣術に格闘術をマスターすればダンジョンでも通用するだろ」

その考えにフィンとリヴェリアは頷く。

「おっと、俺はこれから行くところがあるんで失礼するぜ」

「ん？どこに行くんや」

「一緒に特訓してるヘスティアファミリアのベルつてやつのとこ、昨日別れたつきりでつてどうしたロキ？」

「・・・そうやったドチビのとこか」

ロキはイライラとしながらも前回の神の宴でヘステイアから聞いた話を思い出した。

「ちゆうことはこれからヘステイアファミアリアのホームに行くんか？」

「ああ、そのつもりだったけど・・・」

「よし、うちもつれてけ」

「・・・は？」

「あのドチビに話があんねん、ちゆうわけで案内せえ!!!」

「わああとと、引っ張るなよロキイイイ!!!」

ロキはポロンの腕を引っ張り、ホームの門へと向かった。

「仕方ないね、アイズもポロン達についていくんだ」

「うん、わかった」

アイズは二人の後を追うようにその場を後にした。

「さて、僕らはこれからのことを考え直すのでしょうか」

「フィン、まさかポロンを」

「ああ、『遠征』に連れて行こうかと考えている」

オラリオのバベルの地下にあるダンジョン。

まだすべて攻略されておらず、今もなお冒険者が日々潜り、ダンジョンを解明しようとしている。

遠征とは最大派閥ファミリアのロキファミリアをはじめ、多くのファミリアからの協力を得ながらまだ足を踏み入れていない未開拓階層を攻略することを言う。

「ポロンはまだレベル1だぞ!!!」

「しかし彼は無詠唱でハイポーション以上効果がある回復魔法が使える、さらにはレベル3以上の扱う魔法だって放てる」

「だとしてもダンジョンの深層は危険すぎる!!!」

「確かにそうだが僕はもう一つ気になっている魔法があるんだ」

その言葉に眉を動かすリヴェリア。

フィン は ロキ から 受け 取っ て いた ポロンの ステータスを リヴェリア に 渡す。

「脱出呪文『リレミト』、まだ確証はないけどこれがどうも気になってね」

「まさかダンジョンから脱出する魔法だともいうのか!？」

「どうだろう? でもそれが本当だとしたら今後の遠征の流れが大きく変わる」

遠征では数日、数週間をかけてダンジョンを潜りに行くことになる。

当然、行きだけでも命懸けだがより危険なのは地上に戻る際だ。

休憩などは取るにしても心身共に遠征中はすり減っていく。

そんな中、地上に戻る際にも強力な魔物と対峙することがあるのだ。

もし、『リレミト』という魔法がダンジョンを脱出する魔法だったとしたら、帰りの安全を確保でき、地上に戻る時間も短縮され費用の出費も抑えられる。

ファミリアにとっては利益にしかない魔法だ。

「まだ遠征までには時間がある、それまでポロンについてもっと詳しく知らないかね」

「私は……」

フィンの言葉にリヴェリアは何も言い返せず、フィンとはその場で別れ自室へと戻った。

自室に戻ったりヴェリアは窓際まで移動し外を見つめる。
もうそこにはポロン達の姿はなかった。

「何が・・・正解なのだろうか」

フィンの言い分はリヴェリアにも分かってはいる。

しかし割り切れることでもなかった。

彼女にとってポロンは親代わりのように育ててきた存在だ。

「ポロン、私はどうしたらいい・・・」

彼女はその一言をつぶやき、目線を窓から外した。

〈 episode 10 end 〉

episode 11 勇者

「神様ならバイトに行きましたけど」

「だってさロキ・・ってロキ？」

「ふひやひやひや、神なのに売り子のバイトって、さすがドチビやwww」

ロキはヘステイアがバイトしてることを知り、盛大に爆笑していた。

「はあくもうほつとくか、それより昨日は悪かったな」

「ううん、モンスターに追われて大変だったけど見ての通り平気だよ」

「そいつはよかった」

怪物祭では途中で分かれてからモンスターの脱走騒ぎがあったため、少し心配していたポロンだったがベルの安否を確認できて安心した。

「そうだ、ベルに会わせたい人がいるんだ」

「会わせたい人？」

「ほら、約束しただろキューピットになってやるって」

「えっ!? それって」

ポロンが合図すると金髪の女性が顔を出す。

「久しぶり・・・」

「あっ・・・あいつ・・・」

金髪の女性、アイズが顔を出すとどんどんと顔を真っ赤に染め上げるベル。そしてベルはアイズとは反対の方向へ体を向け走り始めた。

「逃がすか!!! 『ボミエ×2』!!!」

「うわあああああ!!!」

「どうしたベル、そんなゆっくり歩いて」

「うわあああってなにこれ!?!」

ベルは走ってるつもりだったが全然前に進まず普通に歩いてるぐらいの速度だった。

「ベル、急に女の子を見て逃げ出すのはどうかと俺は思うんだがね」

「だっ・・・だつて」

「ほら、振り返ってアイズの顔見てみる、しよぼくれてるぞ」

ベルは足を止め、振り返るとそこには見るからにしよんぼりとしていているアイズを見た。

「あっ・・・」

「まだミノタウロスの時の礼も言えてないんだろ、今がチャンスだぞ」

「でっでも・・・」

まだもじもじとしているベルを見て、ポロンはベルの背中をたたく。

「おまえは男だろ!!好きな女に顔も向けられないんじゃ恋人どころか友達にまで発展しねえよ!!!」

「ポロン……」

「いいか、勇者とは勇気あるもの、最初の一步を踏み出せる者のことだ」

「最初の一步……」

「ああ、お前の最初の一步はアイズに対して面と向かって礼を言うことだ、それができればお前はもう立派な勇者さ」

ポロンは何となくそれらしいことを言い、ベルを勇気づける。

そんなベルは勇者という言葉に反応し、自身の思い掲げる理想を思い出す。

「お前は何のためにオラリオに来たんだ!!!」

最後の一押しといわんばかりにポロンがたたみかける。

「僕は……英雄になって……ダンジョンで出遭いを……」

「そうだ、お前が目指してるのは目の前にあるんだ!!!」

「ポロン!!僕、行くよ!!!」

「ああ、行け!!!勇者ベル・クラネル!!!」

ポロンはベルに『ピオラ×2』をかけて速度を戻し、アイズのもとへ向かわせる。

「へへっ、手のかかる弟分だぜ」

鼻をこすり、微笑むポロン。

「恋のキューピットはここでクールに去るぜ」

「いや、帰さへんよ」

がっちり腕をロキにつかまれる。

「いや、若い者通しでゆつくりと」

「アイズさんをドチビのこの子に渡すわけないやろ」

「ははは、ですよね〜」

基本、結婚等は同じファミリア内で行うことが基本であり、他のファミリア同士とい

うことはまずない。

理由としてはファミリア間のいざこざであったり、生まれてきた子供をどっちのファミリアに所属させるかなど問題があるからだ。

特にベルの恋はぜつぼうてきといってもよいだろう。

ロキとベルの主神ヘステイアはとてつもなく仲が悪く、お互い敵視している。

さらにはヘステイアはベルのことをまるで恋人かの如く愛しており、ロキもまたアイズのことには嫁に出したくないとまで思うほど愛していた。

「ロキ、今回は見逃してくれ、ベルはこの間のアイズ達が逃がしまったミノタウロスの被害者でもあるんだ」

「あく、あのベートが言ってたトマト君の事か」

「そうそう、お礼を言いたいわって言ってたから頼む」

「まあ、ミノタウロスに関してはおうちのファミリアの責任やしな、今回は見逃したる」

ロキはポロンの話を聞き、怒りの矛を沈めた。

(ベルよ、これから俺がお前とアイズをくつつけてやるぜ)

「せやけど、今度あのドチビの子にアイズたん関係で協力したらお前さんの黒歴史がオラリオにしろわたるで」

「ベル・・・俺には無理だったわ」

ポロンはこれ以上ベルのキューピットを続けられないと悟ったのであった。

く 閑話休題く

「げえっ!!なんでロキが僕達の家にいるんだい!？」

「この前の神会で話したいことがある言うたやろドチビ」

「だくれがドチビじゃこのまな板!!」

「やんのかく!!」

「んぐぐぐぐ~~~~~!!!」

ヘスティアがバイトから帰ってきてからロキがいることに驚愕していたがすぐさまお互いがいがみ合いいつもの空気になってしまう。

「ねっねえ、これって止めたほうがいいよね？」

「よく言ったベル、さあ行つてこ〜い!!」

「え？」

おろおろして止めたほうがいいとベルがポロンに提案するとポロンはすかさずベルの背後に移動しいがみ合つてる二人の神めがけてベルの背を押した。

「いててて、ポロン急に何す（むにゅ）る？」

ベルはポロンに背を押されて倒れこんでしまい、起き上がろうとした際に右手に何やら柔らか感触があった。

「べっべっベルくん!?! たたっ確かに、きつきつ君に触られるのは嫌じゃないがきゅきゅ」

現状を説明しよう。

現在ベルはヘスティアに覆いかぶさるように倒れこみ、起き上がる際に思いつきりヘスティアの胸を右手で触ってしまったのである。

ちなみにロキは嫌な予感を感じ取って避けていた。

「ひゅ〜やるなベル」

「・・・大胆」

「やっぱ胸か!!やっぱり胸なんか!!!」

原因を作ったポロンはその光景に感心し、アイズも少し顔を染め今の光景を見ている。

ロキは・・・触れないでおこう。

「ベルくん、みんなも見てることだし、続きはあとでつて・・・ベルくん?」

全く反応してこないベルに違和感を感じたヘステイア達。
ポロンがすかさず確認する。

「あつ・・・気絶してる」

「『……………』」

もはやみんな何も言わずポロンとアイズで協力し、ベルをベットまで運んだ。

～閑話休題～

「それで僕に用って？」

「前回の神会での話、ベル坊のスキルや」

「あ……………」

ベルの持つスキルに関して前回の神会でロキに相談しようとしていたのをヘステイアは思い出した。

ちなみにこの話をするにあたってポロンとアイズはいったん地上で待つてもらっている。

「いや～ボクの勘違い……………ってことにはならないよね」

「当たり前や、全ステイタスは見せんでもええけどスキルの名前と詳細は聞かせてもら

うで」

「はあくしようがないか」

ヘステイアがいつもステイタスを移す用の紙を棚から取り出し、そこに神聖文字を書き込む。

「はい、これがベルくんがポロンくんとの修業をしてから発現したスキルさ」
「!？」

ロキは紙に書かれたことに驚愕した。
その紙にはこのように書いてあった。

【口ト】異世界の勇者と・・・

〈 e p i s o d e 1 1 e n d 〉

episode 12 出遭い

「『デイン』!!!」

「おお〜」

ベルの放った雷の呪文によりゴブリンが魔石に変わる。

「まさかベルが魔法を覚えるなんてな」

「それを言うならこつちもだよ、ポロンが魔法を使えるようになってたなんて」

「弟子のベルが使えて師匠の俺が使えないなんて格好がつかないからな」

「師匠って僕ポロンから何一つ教えてもらったことないんだけど・・・」

ジトつとした目でポロンを見るベル。

そんな視線に対しポロンは笑ってやり過ぎす。

(それにしても『デイン』か・・・おそらく『ライデイン』と同じ系統の呪文だろうな)

(これも『ロト』がもたらした物なんだろうな・・・)

ポロンが関与したことによりベルのステイタスには『ロト』というスキルが追加されていた。

説明文にご丁寧にも世界の勇者とも書かれていた。

(俺のスキル戦友団結で唯一アルスの力だけ使えなかったことはベルが『ロト』のスキルでアルスの力を受け継いだからってことになるよな)

「まっ難しいことはリアとかロキに考えさせるか」

「?」

「気にすんな、それより次の団体さんの登場だ」

ポロンが指で示す先にゴブリン3体とコボルト2体が現れる。

「今度は俺に任せな『メラ』!!!」

ポロンは魔物に向かい走り出し、ゴブリンに三体に対し火炎呪文メラを放つ。

「gygyyaaaaaa」

「拳に気にかけて殴る!!!」

ポロンがコボルトの顔面を殴り、そのまま壁に叩きつけられる。

「gygyyaaaaaa」

「からの〜回し蹴り!!!」

ポロンの回し蹴りがきれいにコボルトの頭に決まる。

二体のコボルトはすぐさま灰となり魔石を落とした。

「GYAGYAAAAA」

「その焦げたお顔も素敵だぜゴブリンさんよ」

メラにより顔にこげめのついたゴブリン三体が一度に襲い掛かる。

「ポロン!!!」

「問題ねえ!!!」

肩掛けの鞘から剣を抜き、そのままゴブリンに向けて振るう。

黒い鎧を着た戦友の動きを思い出しながら体を動かす。

1体、2体、3体とすれ違いざまにゴブリンの頭を落とす。

「へっ、倉庫の中で眠ってたものだけど切れ味は抜群だぜ」

剣についた血を掃い、納刀する。

「ポロン……急に強くなりすぎてない？」

「ふっ……俺もついに真の力に目覚めたところよ」

「なにそれ」

本当の事である。

(レベルアップしてから一週間で気の扱い、格闘術、剣術がだいぶ様になってきたな)
(キラやヤオみたいに技を出せるまで練度は高まっていなくて今なら上層は難なく攻略できそうだ)

「うっし、じゃんじゃん稼ごう」

「ちよ、おいてかないでよポロン」

くオラリオ：ギルド前く

ギルドから出たベルとポロンの二人は途中まで一緒にオラリオの街を歩いた。

「いやく稼いだ稼いだ」

「うん、いつもより多く稼げてる、ありがとうポロン」

「お礼なんていいよこれから一緒に行動することになるパーティーメンバーだろ」

「そうだね・・・これからもよろしくかな？」

「ああ、よろしく」

後にこの二人のパーティーが数々の逸話を残すのだが後のお楽しみに。
そんな二人が談笑しながら歩いているとベルがある声に気づく。

「どうしたベル？」

「今、女の子の音が・・・」

「このクソパルウムが!!!」

「ぐっ!!!」

「っ!!行かなきゃ!!!」

「ちよっ!!待てベル!!」

ポロンの呼び掛けも聞かず裏路地に入る。

ベルが見たのは地べたに横たわる顔に打撲痕のある小さな女の子とその子に武器を向けてる男。

女の子は男が叫んでたように小人族で茶色のくせつ毛が特徴的だ。

「っ!!何があつたんですか」

「!!なんだ小僧、関係ないだろ・・・」

ベルは女の子と冒険者であろう男の間に入る。

「俺はそいつに用があるんだ」

「でも・・・その・・・」

自分よりも明らかに強そうな冒険者に委縮してしまう。

だが、傷つく女の子を見てほつとくこともできない。

(どっとうすれば・・・)

焦ったベルをよそにフードを被ったポロンが現れた。

「いやーお兄さん、連れが出しやばったマネをして悪いね」

気さくにへらへらと笑みを浮かべながら冒険者の男に近づく。

男の目の前に立ち、ポーチからそれなりにふくらみのある布袋を取り出す。

「()はこれで手を打ちませんかね」

麻袋に指を入れ、その中の通貨を一枚相手に見せる。

「ほお、よくわかってるじゃねえか」

「ええ、それはこれぐらい常識ですよ」

男はポロンから布袋を奪い取るように取り、ベルやポロンに背を向ける。

その状況を見たポロンは小声で『ピオラ』を自身とベルに唱える。

ポロンはベルに近づき、耳元で囁く

「逃げるぞで」

「ええ？」

そう囁くとポロンは素早く女の子を片手に担ぎ始めた。

「ヴェルフ印の魔剣バージョン23起動
!!!!!!」

ポロンの掛け声と共に男の方から「パンツ」という破裂音が聞こえた。

「ギャー目がーーー!!!」

その叫び声を聞いた僕はいち早く行動を起こしたポロンの後ろ姿に追いつくため走った。

「ポロンいったい何をしたの」

「ガハハ、遠隔起動できるちよつと強めの風が出る魔剣を激辛パウダーが入った紙風船に仕込んでいたわ」

「何しちやってんの!?!」

「いやゝあんな上から目線のやつ見てるとムカつくから・・・テヘツ」

「テヘツ・・・じゃなゝゝゝゝゝゝい」

そんなことを言いながらもベルとポロンは男が追ってこれなくなる場所まで逃げた。

「はあはあ……ここまでくれば大丈夫そうだな」

「はあはあ……そうだね」

「あの……そろそろ、うぶっ……おろして」

女の子はポロンが運ぶ際に酔ってしまい顔色が悪くなっていた。

そんな様子を見てポロンは「すまんすまん」と軽く謝り、女の子を下ろした。

「……たすけてくださり、ありがとうございます」

「いや、僕は何も……ねえ、なんで君は「ベル」」

ベルがなんであそこで暴力を振られてたかを聞こうとするとポロンがそれを止めた。
ベルの耳元でポロンが囁く。

「あまり深入りするな、同じファミリアならともかく関係ないファミリアに深く関わら

ない暗黙のルールだろ」

「でも……」

ポロンはオラリオでの最大派閥ロキファミアに所属しているためこのような出来事に対して口酸つぱく長年言われてきた。

だからこそ先ほどの場面でフードを被り素顔を出さないよう工夫した。

ベルも頭では理解しているが、それで納得できるかといえばそうではない。

その気持が表情に出てしまう。

そんな中、女の子が口を開く。

「ではすみません、用事が残っているのでこれで失礼します」

「あっ……」

「さっきの出来事は他言無用で頼むぜ」

ベルとポロンは女の子の姿が見えなくなるまで見送った。

「そうだベル、明日から数日間パーティーを休ませてもらうから」

「別に大丈夫だけど？急にどうしたの？」

「なんでも俺の魔法はベルと同じ速攻魔法で使い勝手がいいから遠征でも使えるかどうか確認っていうか特訓だな」

ベルには『メラ』しか使えないことにしているため、多くは語れないが、明日からの数日は幹部メンバーがポロンに付き添ってポロンの呪文がダンジョン攻略で通用するかを見極めるそうだ。

「大手フアミリアも大変なんだね」

「まあな」

「わかった、ソロで頑張ってみるよ」

そして二人は挨拶をかわし、それぞれの帰路についた。

次の日

ポロンの方では、

「よし、行こうかポロン」

「初日から团长様かい!!!」

「リヴェリアからも厳しくやるように言われちゃったからね」

「俺の人生ハードモードだぜ（泣）」

ベルの方では、

「冒険者さん、冒険者さん、サポーターを雇いませんか？」

「えっ・・・君は」

昨日出会った女の子に似たフードを被る茶髪の大きなバックパックを持ったサポーターが自身を売り込み込みに来た。

episode 12 end